

# 人夫出し飯場のエスノグラフィー

——飯場の労働と生活の過程をもとに——

渡辺拓也

## 1 はじめに

「人夫出し飯場」とは、建設産業の末端の日雇い労働力を派遣する派遣業者であり、そのための労働者を寝泊まりさせる宿舎の経営体でもある<sup>1)</sup>。通常、この宿舎としての機能にのみ注目して、これを「飯場」と呼ぶ。

飯場は全国各地に存在する。北川由紀彦は、行政資料を元に「東京、神奈川、千葉だけでなく見積もっても800カ所程度の飯場が存在して」おり、「同じく、少なく見積もっても、10,000人内外の人々が飯場に寝泊まりしながら働いている」と推定している[北川 2002: 110]。

飯場に住まい就労する労働者（以下、飯場労働者）を集めるには、大別して寄せ場における路上求人、新聞・求人雑誌による求人の二つが考えられる。寄せ場とは、早朝に求人者と求職者の双方が訪れ、路上で雇用契約を結ぶことが慣習化している地域のことをいう。この路上求人は、新聞広告・求人雑誌などが発達する以前からある求人方法である。東京の山谷、横浜の寿、名古屋の笹島、大阪の釜ヶ崎などが代表的な寄せ場であり、山谷、寿、釜ヶ崎の三つは「ドヤ」と呼ばれる簡易宿泊所が集まる「ドヤ街」（日雇労働者の町）でもある。

本来、路上求人は違法行為であるが、釜ヶ崎においてのみ「相対求人（相対紹介）」として公式に制度化されている。本稿で扱うのは釜ヶ崎で求人する飯場についてである。

社会学的な問題として飯場が登場するのは主に寄せ場研究の領域においてであった。寄せ場のドヤに居住し、路上求人によって就労する寄せ場労働者の就労先の一つとして飯場があった。当初、飯場は寄せ場の問題を構成する要素の一つであり、中心事項ではなかった。しかし、かつて、建設日雇労働力をプールする場として機能してきた寄せ場の縮小と並行して、飯場網の拡大・飯場の巨大化が進行したのではないかとされている現状がある[中根 1999][青木 2000]。寄せ場にばかり注目しては都市下層の問題が捉えきれず、建設日雇労働力をプールする機能を持ち拡大する飯場網・巨大化する飯場の解明が重要度を増してきている<sup>2)</sup>。しかし、飯場の労働や生活の実態を直接的に明らかにしたものは、いくつかのレポートを除けば、研究領域においては存在しない。飯場の実態を踏まえないと議論が不十分なものになることを避けられない。本稿は、重要度を増しつつも圧倒的に不足している飯場の実態をエスノグラフィーとして描くことを試みる。現況において、事例を断片化

して扱うよりも、網羅的に対象を捉えるエスノグラフィーとして提出することに意義があることを主張したい。

以下では、まず調査・データについて整理する。次に、飯場での生活についての基礎的な知識を整理する。エスノグラフィーの記述にあたるのはその後の「飯場日記」である。最後にまとめとする。

## 2 調査・データについて

用いるデータは、筆者が大阪の寄せ場・釜ヶ崎の早朝の相対求人に入寮した奈良県にあるA建設での労働と生活を通して得られたものである。調査期間は2003年の8月19日から9月1日までの14日間である。

次にデータの提示方法についてである。データは「飯場日記」として日記形式にまとめた。「飯場日記」は、調査中にフィールドノートにつけたメモを元に、調査終了後に日記形式に再構成したものである。その意味で、調査中にリアルタイムで書かれる「フィールド日記」と同じものではない。再構成の際に留意したのは、一日の出来事を時系列に沿って記述し、出来事に付随してその時その時で筆者が感じたことを書くということである。そのため、記述には筆者自身の感想が含まれている。これにより、飯場がどのような場所であり、飯場労働がどのような労働であるか、そして、飯場という経験がどのようなものであるかを、読者は追体験できるようになっている。データの性質から、描かれるのは、「飯場労働未経験者が初めて飯場に入り、契約期間を終わらせるまで」の限定的な場面である。しかし、この初体験の14日間には、これ以降では自明視されてしまう飯場生活のありとあらゆる要素に意識が向いており、エスノグラフィーの記述として十分な価値を持っている。また、労働者が飯場に入り、契約を終えて退寮するまでの「最初から最後まで過程のセット」であることも重要である。

なお、本文中の個人名・会社名は全て仮名である。

## 3 飯場での生活について

飯場労働者は10日、15日、1ヶ月というように、実働の期間労働契約を結んで飯場に入寮し、契約満了までを過ごす。この就労形態を<契約>という。これに対し、1日だけの労働契約を結び、その日働いたぶんをその日に受け取り、同じ現場で続けて働くとしても労働契約を結び直すことになるような就労形態を<現金>という。どちらも寄せ場の俗語である。

本稿では扱わないが、筆者がこれまでに入寮した飯場はA建設の他に二つあり、これらの飯場ではいずれも労働者一人一人に個室が割り当てられていた（個室がなく、雑魚寝しな

ければならない「タコ部屋」飯場も存在する)。個室といっても2畳から4畳の部屋に14型のテレビ、ウィンドウクーラーと布団が備え付けてあるというものであり、テレビとウィンドウクーラーはコインシューター式で有料化されている場合もあった。飯場では細かな所まで金銭を要求される。飯場の事務所では、「諸式」として軍手・長靴などの仕事で使う道具や、洗剤のような消耗品、ビールなども扱っているが、これらは市価より高めに設定されている。また、洗濯機や乾燥機もコインシューター式である。

飯場では、宿泊費・食事代として「飯場代」がかかる。飯場代は現在では1日3,000円前後で、仕事の有無に拘らず毎日賃金から天引きされる(1日の賃金は10,000円前後である)。そのため、比較的良心的な飯場であっても、仕事が少なければ天引きが積み重なり借金となることもある。また、賃金の未払いをする「ケタオチ飯場」や、暴力的な労働者管理を常套的に行なう「暴力飯場」と呼ばれる悪質な飯場もある<sup>3)</sup>。飯場は極端な場合、あからさまな犯罪行為の場所ともなるが、そうでなくともその基本的な労働条件は劣悪である。さまざまな手段で収奪がシステム化され、人夫出し業者は決して損をしないようになっている。

次に飯場の施設についてである。筆者の入寮したことのある三つの飯場では、プレハブ造りのものと鉄筋コンクリートの建築物とがあった。基本的な施設として、労働者の個室があり、共用の食堂、浴場、トイレ、洗濯機コーナーなどがある。浴場の広さや洗濯機の台数は充分とは言えず、毎日の仕事の後は奪い合いか競い合いのようにこれらを利用しなければならない。

労働者は毎朝5時過ぎには起床する。仕事の開始は8時で、派遣先によって飯場から現場までの距離が異なるため、出発は6時から7時過ぎとなる。つまり、派遣される現場によって出発時間が異なるわけだが、出発時間が労働者に伝えられることは稀であるし、派遣先が当日にならないとわからない場合も多いため、早めに起床しなければならない。終業時間は17時だが、残業を伴うこともある。上述したように、飯場から現場までの距離が異なるため、17時ぴったりに終業になったとしても、飯場に帰り着けるのは19時過ぎであったり、場合によっては20時近くなったりすることもある。

最後に、飯場の管理側の人間について説明しておく。基本的に、トップに社長が、その下に専務がおり、番頭とよばれる労働者の直接の世話係であり、雑用一般をこなす人間がいる。厨房があり、通いや住み込みで調理人がいる場合もあるが、ほとんどを外注している飯場もあった。専務は入退寮時の労働者の手続きや日当の前借りや支払い、諸式の取り扱いを行っている。社長や番頭は早朝の寄せ場に車を運転して求人に行く役割も担う。「社長」「専務」「番頭」という役割とその呼び名はどの飯場でも共通していた。

## 4 飯場日記

「飯場日記」本文に入る前に、対象となる14日間について概略を整理しておく。初日の8

月19日はまだ飯場に入っていない。飯場に入ろうと寄せ場を訪れるが、その試みが一度は失敗するのがこの日である。前日に知り合った労働者の協力もあって、翌8月20日には飯場に入ることが叶う。入寮中、仕事が休みになったのは日曜日だった8月24日・8月31日のみであった。A建設は基本的に土曜日の仕事が少ない飯場だったが、筆者の場合は仕事があった。その他、当日になって仕事がキャンセルになったり、現場が変更になったりというアクシデントがありながら、9月1日の最終日まで、筆者は滞りなく働ききることができた。

## 2003年8月19日(火)

午前5時過ぎに起きる。とりあえず睡眠はとれた。JR線を乗り継ぎ新今宮駅に降り立ったのは6時ごろだった。

前日に作業服と軍手と帽子を買った。作業服上3着、下2着、タオル3枚、携帯電話の充電器、クシ、小さい鏡、歯ブラシ、スーパーのビニール袋数枚、折り畳み傘、普通の軍手4つ、ゴム手1つ、下着とTシャツ、靴下数足ずつ、筆箱をリュックサックに詰め込んだ。それから暇な時に読もうと本を数冊見繕った。そして新品のフィールドノート1冊。

Tシャツに作業ズボンで安全靴、帽子、腰にはウェストポーチをつけ、荷物を詰め込んだリュックサックを背負ってセンター<sup>4)</sup>を目指す。

6時だと遅すぎるだろうかと少し焦っていた。3月に<現金>の仕事に行った時は午前4時にセンターに行かなければ仕事は得られなかった。5時に行っても駄目だった。あろうことか今回は6時だ。

しかし今回の目的は<契約>だ。そもそも今回飯場に<契約>で入ろうと思ったのは西成公園で野宿する門脇さんと保田さんにすすめられてのことだった<sup>5)</sup>。それもケタオチ飯場に入れというすすめだ。「今の飯場は誰も入りたがらないから昼間に行っても大丈夫だ。むしろ昼間に行け」とまで言われていた。昼過ぎまで求人しているということは、それだけ労働者が行きたがらない条件の悪い飯場だということである。

門脇さんの「飯場に入ってみないとわしらがホームレスをしている理由はわからん」という言葉から飯場入りを決め、それから5ヶ月の念願の飯場入りなのだ。

というわけで少しくらい遅く行っても大丈夫だろうと思った。いや、正直なところ、早起きするのがしんどかった。もし、4時にセンターに行こうと思ったら3時前に起きないといけない<sup>6)</sup>。

5ヶ月前を思い出しながら車にかけられた札<sup>7)</sup>を見てまわる。やっぱり車の数が少ない。時間が遅いせいなのか、時期的にもう仕事が少なくなるからなのかわからない。まず10日契約の車が見つからない。「仮卒職人限定」などと書いてあってもどうしようもない。日雇いの王道といえば土工という個人的な思いがあって理想は土工で行くことだったがなかなか難しい。

契約期間は書いていなかったが「土工・入寮者募集」という札を出している車の人に話し

掛けてみる。「10日契約で行きたいんですけど」と言うと「兄ちゃんアルバイトか?」と聞かれる。「土工の経験あるんか?」と聞かれる。もちろんない。「仕事分らん人間が入ったら1人ついて教えてやらんといかんやろ? 1ヶ月契約ならともかく、10日契約じゃ仕事覚えられんやろ」と言ってあしらわれた。去り際に「土工なめとったらあかんで」と言われてしまう。

次に「工場作業・10日契約」というところへ行ってみる。「作業わかるんか?」と聞かれる。さっぱり分からない。正直に分からないと言ってしまう。「それじゃあかん」と言われる。

ここまで簡単に断られてしまうのは正直意外だった。釜ヶ崎をうろうろしていると「兄ちゃん若いから仕事あるやろ。わしらはもうあかん」と溜め息まじりに言われることがある。初心者でもとりあえず行くだけは行けるだろうと思っていたのに、案に相違してうまくいかない。

もう条件に合うところがない。そもそも選択肢が少ない。実はそれでも声をかけてくれるところはあった。「兄ちゃん<契約>いかんか?」「何日ですか?」「1ヶ月や」「じゃいいです」「何日やったらええんや? 1週間か?」と笑われる。何でそこで笑うか。声をかけてくれたのは1ヶ月契約のところばかりだった。これがいわゆるケタオチ飯場<sup>8)</sup>というやつではないだろうかと思った。

「初心者はどこへ行ってもまずは断られる。食べるためには否応なく1ヶ月契約で入らなければならない。そこで苦勞しながらも仕事を覚えていく」のが寄せ場のルールなのだろうかと思ひ始める。とりあえず僕にでも参与する道は開けているわけだ。

しかし、今回僕にはあまり日にちが無い。いや、正直に言おう。いきなり1ヶ月契約というのは怖かった。仕事は分からないし体力も無い。<契約>だと飯場を出るまでに実働契約日数の3倍かかるというふうにも聞いていた。学校が始まったら契約破棄して1円も貰えなくてもいいから帰ってくればいいとも考えられる。金を稼ぐことが目的ではないのだから。10日契約なら3倍かかっても10月には帰ることができる。しかし、本音を言えば、つまるところびびっていた。及び腰、逃げ腰、踏み込みが足りない。

さすがに今日はもう駄目かと思う。少し若い人(といっても30代半ばか後半、あるいは40代)がいたので話し掛けてみる。「もっと早い時間に来ないと駄目なんですかね。<契約>に行きたいんですけど」と言うと「いや、僕あまりくわしくないんで」と言われる。こんな朝早くから仕事探しでもないのに何をしている人なんだ。

今日はドヤに泊まって明日の朝4時に来てみようと思った。とにかく知り合いに会って少し相談に乗ってもらおうと思ひセンターの裏の路地に向かうところで声をかけられた。

十字路の角のビールの自販機の前でビールを飲み始めたばかりのおっちゃんが二人。黄色いシャツのおっちゃんが言う。

「仕事見つかったか?」

やけに馴れ馴れしい。知り合いではない。しかし僕もいいかげんこういうノリには慣れているので普通に話す。もう一人のでっかいおっちゃんが言う。

「山登りでも行くんか？」

「自分その格好ではあかん、作業服持ってないんか？」

作業服はリュックサックの中だ。おっちゃんたちのレクチャーを受けて服装を直す。まず、帽子は脱ぐ。ウェストポーチも外してリュックサックの中へ。作業服を着てタオルを首に巻く。さらに、カバンは必ず片方の肩にかけるか、片手で何気なく持てと言われる。

「これでもう1回行って来い！駄目やったらわしがもう1回レクチャーしたるわ」

「なんでわしがここまでレクチャーしたらなあかんのや」というおっちゃんの笑い声を背にもう1度センターに戻る。気持ちはありがたいのだが、行けそうなどころには1度声をかけて既に断られているのだから、格好を変えたところで今日のところは意味が無い。しかし、犬も歩けば棒にあたるというか、棚からぼたもちというか、手が尽きたところでまた道が開けてきた。仕事には行けなくても今日はあのおっちゃんたちの話を聞かせてもらうことができそうだ。

もしかすると新しい車が来ているかもしれないし一応センターを一回りしておっちゃんたちのところへ戻る。

「だめやったんか！」黄色いシャツのおっちゃんが言う。10日契約で飯場に入りたいということをおっちゃんたちに言う。すると「仕方ない、ついて来い。わしらがなんとかしてやる」と言う。今度はおっちゃんたちと三人でセンターへ向かう。しかしおっちゃんたちに口をきいてもらうにしても僕はバカ正直に経験がないことを手配師<sup>9)</sup>に話してしまっているのだから望みは無い。自分の間抜けさが露呈するようで少し憂鬱になった。

1度声をかけられて断った1ヶ月契約のところへ行く。

おっちゃん「この兄ちゃん連れてってくれや」

手配師「わしもさっきから行こうというとるんや。でも1ヶ月はいやや言うから仕方ない」

おっちゃん「お前（僕のこただ）そんなこと言わんと行けや。ぜいたくな」

再び自販機の前に戻る。「何で1ヶ月はあかんのや。嫁さんに仕送りでもするのか？」と聞かれ、「いや、そういうわけじゃないんですけど。やっぱり経験がないと駄目なんですよか？」とさりげなく話題を変える。寄せ場で働いた経験は無いに等しいということを打ち明ける。すると、

「よし、なんとかしたるわ」

と言われ、おっちゃんたちに連れられてJR環状線沿いへ出て国道43号を東へと歩く。

「西成はもう情が廃れたとか言うけどな、そんなことないんや」

「仕事紹介したからといって何かよこせとか何かしろいうんやないで。誰にでも初めてはあるんや。わしにだってあった。そういうことや」

センターから離れてどうするのだろうか。僕の知らない求人ルートがどこかにあるのだろうか。先行き不安を感じながらおっちゃんたちに付いていく。

センターから離れたところにもポツポツと大型のワゴン車が停まっていた。その車の運転手におっちゃんが交渉してくれる。

運転手「今日は無いで」

おっちゃん「わしやないんや。この兄ちゃん一人でええから飯場連れてったって。10日契約や」

本気で僕のために仕事を探してくれるようだ。驚いた。会ってすぐの僕のためになぜそこまでしてくれるのだろう。これがおっちゃんの言う「西成の情」？カマ（釜ヶ崎の略称）兄弟とかそういう言葉で語られるアレなんだろうか？ちょっとこれは感動もののエピソードではないか。

おっちゃんたちが頑張ってくれたが、どうにもうまくいかなかった。やっぱり時間的なものがあるのだろうか。もう今日はいいですから、と思う。申し訳なくなってきた。

「あそこ行ってみよう」

と釜ヶ崎内へと戻る。おっちゃんたちが言うには、今日ある会社の仕事に行けるはずだったのだそうだ。ところが手配師の手違いで1人多いということになった。おっちゃんたちはその仕事は初めてだったということもあり、二人が仕事を辞退することにしたのだという。それで手配師の方はちょっとした借りが二人にできたはずだと。

おっちゃんたちはその車のところへ行行って頼んでくれた。道すがら「土工の経験無いとか言うなよ。経験無くても、あるある、1年くらいあるいうとけばええんや。（仕事に）行ってしまえばこっちのものや」と言い聞かせられていた。「行ってしまえばこっちのもの」「車に乗ってしまえばこっちのもの」とは過去にもベテランの日雇い労働者に言われたことがある。しかし僕はそういうはったりがめちゃくちゃ苦手なのだ。

二人を見つけた手配師が言う。

「今日はすまんかったな、明日は入れとくわ」

「すみませんお願いします。ところでこいつ10日契約で飯場入れたってくれませんか。よう働きます。真面目なやつですよ」

さっき会ったばかりの人間を「よく働く」とかよく言うなあと思う。手配師が僕に聞く<sup>10)</sup>。  
手配師「土工の経験あるんか？」

僕「あります」

手配師「どのくらいあるんや？」

僕「……………」

「どのくらいあるのか」という質問は想定していなかった。付け焼き刃の嘘なんてすぐにばれてしまう。相手も馬鹿ではない。おっちゃんたちが必死でフォローしてくれる。

手配師「とりあえず二人は入れとくわ。明日の朝来てや」

結局、僕は行けるのか行けないのか、曖昧なままその場を去ることになった。

「アブレた（仕事が見つからなかった）もんはしゃあない。行くか」

どこへ行くのか分からないままおっちゃんたちについていく。行き先はビールの自販機だった。おっちゃんたちにビールを買ってもらい路上に座り込んで飲みはじめる。この時午前8時くらいだったと思う。この時間から飲み始めて一体一日どう過ごすのだろうか？

会話の中から、黄色いシャツの人は大塚さん（40代／推定）、大きい人は太田さん（40代／推定）<sup>11)</sup> だということを知る。この自販機の前でよく飲んでるようだ。ここで飲みながら僕は自分が大学院生で釜ヶ崎を研究していること、研究の一環として飯場に行きたいのだということ話を話した。

大塚さんは「西成なんて研究しても意味ないぞ。もっと役に立つことを研究せえ」と言う。太田さんはそういうことには全く興味がないようで、相変わらず僕の格好を「山登りのようだ」とからかってくる。

西成公園で調査している時も「ホームレスなんて研究しても意味ない。どうしてこんなところにいるんだ。ボランティアとでもいうなら別だが」と言われたことがある。結局今にいたるまでこういった問いかけにはうまく答えられない。

路上で飲んでるといろんな人が二人に声をかけていく。一緒に飲んでいく人もいた。酒はおごったりおごられたりだ。とてもではないがここで書くことができないような話もたくさんあった。大塚さんはふざけて「書くなよ！」とその都度言っていた<sup>12)</sup>。

お約束のように、地元がどこかという話も出た。僕の地元で働いていたことがあるという人もいた。僕が子どものころにこの人はあそこで働いていたのかと感慨深かった。本当にいろんなところへ行ったことがあるんだなあ。一生の間生まれた県内から出ない人だっているのに。

10時くらいに二人の知り合いが泊まっているドヤの一室を訪ねる。何か儲け話があるのだそうだ。その知り合いの松本さんとセンターへ出かける。どうやらここで先方と待ち合わせのようだ。何の儲け話か知らないが、お金が入るのが1週間先だということに太田さんは興奮めしたらしい。「1週間後にここにおるか分からんのに」と言っていた。

僕はもう酒は飲みたくなかったのだがセンターでも酒が追加され、三人で飲んだ。「飯場なんかいかんでも熟女マッサージやったらいいよ。自分ならいける」と松本さんが言う。熟女マッサージ…そういうのもこの限界ではあるのだろうか。「ダイスポ」というスポーツ新聞に求人載っているそうだ。いや、やらないけど。

ずいぶん待ってやっと先方がやってきた。交渉は成立したようだ。今度は太田さんの泊まっているドヤに移動する。みんなでドヤの風呂に入るという。僕も誘われたが酒がかなりまわっていたので部屋で待っていた。

何をするでもなくみんなで競艇の中継を見る。太田さんが競艇のうんちくをたれる。松本さんはちゃんと相槌をつきながら聞いていた。大塚さんが出かけ、松本さんが競艇をやりに出て行き太田さんと二人になった。特に話すことも無い。そろそろ僕もドヤを探しに行きたい。そう思っていると、

「明日仕事行く気があるなら朝4時40分にこの部屋に來い」

と太田さん言われた。一日いっしょに過ごしているながら、僕はまだ「あ、本当の本当に仕事紹介してくれるんだ」と思った。

とりあえず行き当たりばったりでのんだくれた一日は終わった。どうなるか心配だったが

明日には飯場に行くことができそうだ。遅れて行ったおかげで知り合いが増えていろんなことがあってかえってよかった。

ドヤは昔よく泊まっていた600円のところではなく、800円でクーラーとテレビ付のところにした<sup>13)</sup>。

## 2003年8月20日(水)

昨日は16時ごろドヤに入ってすぐに寝た。フィールドノートを書くのも億劫だった。午前0時に起きてコンビニにご飯を買いに行き、フィールドノートを書きまくった。まだ飯場に行けてもいないのにノートは細かい文字でいっぱいだ。これから一体何が待ち構えているのか少し不安だ。大体まだ調査が助走の段階というのはフィールドノートを書きまくるものなのだ。

2時くらいに書き終わって少し寝ようとしたのだが無理だった。3時くらいに廊下のクーラーが止まる。何故止める……。暑いよ。

4時になって、もう待ちきれず、荷物を抱えてドヤを出る。太田さんのドヤの前で20分ばかり時間をつぶし、ドヤの中で10分ほど時間をつぶした。顔を洗いに出てきた太田さんに挨拶する。自室で準備をしながら太田さんは「眠いな」としわがれ声で笑った。

そういえば昨日センターから太田さんのドヤへ移動している時、前から来た自転車が太田さんにぶつかった。ぶつかった人は気弱にあやまっていたが、太田さんは去ろうとする彼に木の棒を持ってケンカを売ろうとしたのでびびった。

大塚さんと松本さんが(特に松本さんが)必死に止めていた。これはいつもの二人の役回りなのだろうか、と思った。通りのわきで屋台をやっているおばちゃんに「早く向こうに行つて。迷惑やから」と心底迷惑そうにささやきかけられた。

そんなに怒るほどのこととは思えなかったのだが、太田さんはかなり腹を立てていた。不可抗力なんだし、そんなに怒らなくてもと思う。いつも笑っているがこの人は基本的には怖い人なんだろう。

太田さんの準備が終わってドヤを出る。太田さんは大塚さんに携帯で連絡を取っていた。太田さんと大塚さんは携帯をビニール袋に入れている。汗でぬれないようにだろうか。僕も真似をすることにした。

大塚さんと合流して昨日の車のところに行く。まず太田さんと大塚さんが「二人は<現金>やったな」と認識される。僕のこともちちゃんと覚えていてもらえた。「今日解体の仕事あったやろ。今日から働けるな? 今日<現金>でそのあと飯場入れ」ということになる。

解体の仕事なら以前にしたことがあるし、初日のウォーミングアップには最適だ。「それじゃこの車に乗って待っててくれ。まだだいぶ時間あるからな」

暑いからもう少し外にしようとして太田さんが言うので車の裏の自販機の前にとむろする。すると僕の知り合いの男性が自販機に偶然やってきた。

「仕事行けたんか！西藤さんに伝えとくな。100万くらい稼いできいや」

西藤さんというのも僕の知り合いだ。釜ヶ崎で中古自転車屋をしていて、彼の雇い主にあたる。仕事に行く前に知り合いに偶然出会えて嬉しかった。これが朝5時くらいだった。彼は今は肉体労働はしていないはずだ<sup>14)</sup>。ずいぶん早起きなんだな。

彼と僕のやりとりを見て大塚さんが「なんやお前西成顔広いやんか。やっぱり警察のスパイとちゃうか？」と言う。実は昨日自販機の前で飲んでる時にも知り合いと出くわしていた。これまでは同じ釜ヶ崎内で別々に出会った人たちと同じ場面で一緒になることなんて無かった。前より釜ヶ崎に巻き込まれることができたような気がする。

手配師の人に声をかけられて車に乗り込む。大塚さんが遅れて乗ってきて、太田さんと僕に缶コーヒーをくれた。こういう貰い物をするには重要な意味があるような気がする。自分だけが飲んではいけないという規範がある。

昨日飲んでる時、さすがにアルコールばかり摂るのがきつくて缶コーヒーを買って飲んだ。すると大塚さんに「自分のだけかい」と冗談まじりではあったが怒られた。実は僕も自分のコーヒーだけ買うことには少し躊躇したのだ。案の定怒られた。しかし、みんな次から次に飲んでるところにコーヒーを買っても仕方ないと思ったのだ。どう解釈すればいいのだろうか。

6人の人夫を乗せてワゴン車が出発した。現場はどこかわからない。とにかく車は走り出したのだ。初めて<現金>で仕事に行った時に知り合った賀村さんが僕を気遣って言ってくれた「とにかくケツわらんように（途中で音を上げないように）一日がんばろうや」という言葉を思い出した。

ワゴン車は都市高速を果てしなく走る。現場が遠いのか飯場が遠いのか。

答えは両方だった。着いたのは奈良だった。連れてこられたのが飯場だった。これが飯場か、と思わず息をのんでしまうほど、初めてみた飯場はめちゃくちゃほろい建物だった……。プレハブに毛が生えたようなものが飯場だった<sup>15)</sup>。道路に面した壁の前面にジグザグの鉄板がくまなく張られている。何故??壊れたテレビや自転車、車が端っこの方に寄せてある。すさんだ空気が漂っている。車の中ではどんな山奥にあるんだろうと不安になったが、近くにコンビニもあるし、駅も近いようだった。これだったら足りないものは買いにいける。生活に必要なものは飯場で買えると聞いていたが、とんでもない値段でぼられたりするかもしれないという不安があった。コンビニが近くにある以上そんな心配はいらない。

着いたらまず食堂に通された。朝食を食べさせてくれるらしい。白ご飯とみそ汁、そして漬物が朝食だ。食堂は古い宿泊訓練所みたいだ。床はところどころ軋んでいる。食べ終わったら壁際のテーブルに積んである弁当と割り箸を取って、各々が新聞紙で包む。これが昼食らしい。

ここからそれぞれ迎えが来て現場に向かうらしい。現場から車がやってきて、名前を呼ばれた者が乗り込む。釜ヶ崎から同じ車で来ても人によって現場は違うらしい。

車を待っているとき、大塚さんと太田さんが鍵の空いているパンのドアを開けて中で堂々

と座り込んでくつろぐのでびびった。余裕がある、というかちょっと凶々しく思えるほどだ。僕はこのあと飯場に入るのに、「あいつらの仲間だ」と悪い印象ついたらどうしてくれるんだと少し思った。それから彼らが研究や調査についておおっぴらに喋りださないかとヒヤヒヤした。

ずいぶん待って迎えて現れたのは普通の車だった。車の中で世間話が始まる。大学院生であるということはこの人には話さなかった。聞かれなかったからだ。若いというだけで飯場労働者の中ではいくらか浮いてみえる。そのことを特に気にして聞いてくる人には正直に素性を明かそうと思っていた。しかし全然気にしない人もいる。僕としてはかなり「異邦人」かのつもりでいたのだが思っていたより意識しないで済んだ。

車の中で10代～30代の若い人間ばかりの飯場があるという話も聞いた<sup>16)</sup>。この会社は奈良にあるのだから、その飯場も奈良か奈良近辺にあるのだろうか。……そういう飯場を知っているから僕が飯場にいてもそう違和感を覚えなかったのかもしれない。

「解体」という言葉から、前に行った時のようなものしか想像していなかった。僕一人だけがその現場に行くというのも驚いた。もしかしたら現場には他の飯場から来た人がいるのかと思ったが僕だけだった。現場は建造中の家屋。庭に散らかっているゴミを拾い集めてブルーシートを洗う、とりあえず指示されたのはそれだけだった。それだけ指示すると彼は車で去っていった。

面食らった。作業自体は言われたとおりの簡単なもの。雑用も雑用、子どもでもできる雑用だ。これは僕が初心者であることを思いっきり配慮して割り当てられた特殊な現場なのだろうかと思った。

この仕事をやって「手元」という言葉の意味がよーく分かった<sup>17)</sup>。本当に手元だ。何の技術もいらない。職人や社員にやらせるほどのものじゃない。下働きの中の下働きだ。家を建てるという過程においてほとんど意味のない役割。「僕って何？」と疑問を抱かずにはおれなかった。「これが下層労働か～」と心底思った。

誰もいない現場でとにかく言われたことを始める。上の庭からガレージ部分に置かれた鉄枠の中にゴミを運ぶ。端っこが地面に埋まっているブルーシートをはがしてまとめる。あまりに単純過ぎる。「もしかしてこれを単純な作業とってしまうのはほとんどもない落とし穴で、これはこれで配慮しなければならないことがたくさんあるのかもしれない。僕が知らないだけで……」という不安がよぎりっぱなしだったが、間違ったら間違っただで怒られるしかない自分を納得させ、続けて作業をした。こんな単純な作業でへまをしていたら「やっぱりお前飯場に入れられんわ。帰ってくれ」と言われるんじゃないかとめっちゃくちゃ不安だった。それはそれで「手元は奥が深い」というデータにはなると無理やり納得して作業を続けた。僕はかなりの心配性だと思う。

1時間くらいして大体片付け終わってしまった。あとはシートを洗うだけだ。早めに終わったらどうしたらいいんだ、あの人ちゃんと戻ってきてくれるのか？それとも実はこれは「とりあえず」の作業に過ぎなくて、次の指示がある前にさっさと片付けなければならない作業

なのだろうか？他にもやることは山積みなのだろうか？そうだよな、こんな単純なことだけでお金が貰えるはずないもんな、と思い直して作業を続ける。

しかし、実際のところ「こんな単純なこと」が僕の仕事の全てだった。ブルーシートを洗う作業も簡単なようで結構時間がかかった。現場で行われている作業の手順が分からないと疲れる。よく「作業の手順がわかってないときついぞ」と言われることがあった。本当にそうだった。ヘマをするほど難しい作業はあまりないのだが、「単純な作業を単純にこなせばいい」ということすら初めての人間にはわからないのだ。

9時過ぎてようやく他に人がやってくる。塗装会社の人だった。やっぱり手元は僕一人らしい。塗装会社の人たちの作業とは全く関係なく、黙々と片づけをする。この人たちも委託されているだけで、僕に作業の指示をするという立場ではないらしい。「こんなにほったらかしなのってあり？怠けるよ？」——とか思っていると、釜ヶ崎のある労働者に昔いわれた「手元は言われたことを言われたとおりにやればいい。自分のペースを守って、とにかく、倒れないように一日、そこそこで働くこと」という言葉を思い出した。

ブルーシートを洗い始める。ここでも迷う。どこまできれいにすればいいのかわからない。軽く流すだけで大丈夫だろうと思って適当に洗う。しかし乾いてみるとこびりついた砂が目立つ。これじゃやばいかなと思って手でこすって洗いなおす。しかしいくらこすっても乾けば汚れは目立つ。こすりすぎて指の皮が腫れてしまった。この、ブルーシートを洗うという単純な作業も結構手間がかかる。それでも必要な作業ではあるのだろう。「下層労働って……」としみじみ思う。

途中で家の壁に立てかけてあるモップの存在に気づいた。しかしこれは使ってもいいものなんだろうか。どこの会社の所有物かわからないではないか。とりあえず塗装会社の人に聞いてみた。「おお、ちょうどいいやんけ。上等や」と言われた。どうやら塗装会社のものではないようだが、使っていけないものでもなさそうな感じだ。怒られたら怒られた時だ（不安でいっぱい）。

モップを使うと作業が格段に楽になった。塗装会社の人には「そんなもん適当に水で流すだけでええんちゃうか」と言われるが信用できない。雇い主は彼ではないのだ。モップを使ってもやはり汚れは残ってしまう。それでこれはこういうものだとやっと納得できた（難儀なやつだ）。

12時を回るが昼食を食べていいものかどうか迷う。塗装会社の人が昼食に入ったのでまあいいかと昼食にする。弁当はあるのだが飲むものが無い。ジュースの自販機が近くに無いか塗装会社の人に聞く。かなり遠いらしい。「お茶だけで！」と言ってお茶をくれた。ありがたかった。近くに自販機がないことを先に教えて欲しかった。「黒田さん（僕を迎えに来た人、雇主）にお茶買わせんといかんぞ」と言われる。この辺でやっと、この塗装会社は僕と同じように契約で雇われている外部の会社なのだと分かった。建築現場というのはいろんな会社が必要に応じて委託される仕事場なのだとここを再確認した。考えてみれば当たり前のことだ。そして黒田さんの会社のように、作業全体を見渡しているんな委託

業者を手配する会社があるのだ。その黒田さんの会社の上にはさらに大きな会社があるのかもしれない。一体どれだけ高いのだこのピラミッドは。建築業界自体もともと分業が前提で、スーパーバイザーのように上に、上の上にと元請会社がいるのだ<sup>18)</sup>。

塗装会社の兄ちゃんと少し話す。高校を出てからずっと塗装の仕事をしているそうだ。大学院生で研究をしているのだということ話をすると、「さっさと就職した方がええで」と言われる。ああ、そうかこの人は大学という場所で学んだ時間が無いんだよなと思った。大学でさえ縁の無い場所なのに、大学院までいくともう何をやっているんだこいつという世界かもしれない。労働の場に出てみると学問なんて意味ないのかもしれないと思う。だって少なくともこの人には関係なさそうだ。この人にも興味を持ってもらえる研究ができるのだろうかとも思う。自分で稼いで自分で生活していることに比べたら僕のやっていることなんてどんなに格好つけても道楽だ。格好つけると格好悪い。

フィールドワークを始める以前は肉体労働なんて嫌だと思っていた。できないと思っていた。今では辛いながらも肉体労働もいいなと思う。僕が住んでいるマンションも道路もビルも大学も全部、建設労働で作られたものだ。この日本中の道路、日本中の建物全部彼らが作ったものだ。そう考えると素晴らしい仕事だと思う。僕もこの街を少し作った。そのことがちょっと嬉しかったりするのだ。「僕にもこの街が作れるのだなあ。実際作っちゃったよ！」とほんのり気持ちがいいのだ。

ブルーカラーとホワイトカラーと言う。どっちもあって世の中回っている。いろんな仕事をしている人がいて世の中は出来上がっているのだ。自分の知らないところで重要な仕事をしてくれている人がいるのだ。知らずにいたことがバカみたいだ。

ぼちぼち午後の作業に入る。ひたすらブルーシートを洗う。途中で黒田さんがやってくる。この頃になると他の作業をする人たちも来ている。1枚だけ10メートルくらいの大きなブルーシートがあつて苦労した。途中から黒田さんに手伝ってもらってなんとか洗う。

最初作業服を着て仕事していたが午前中にもう上着は脱いでいた。作業は長袖でなければいけない。どこに引っ掛けて怪我をするかわからないからだ。しかしブルーシートを洗うだけだからいいだろうと思いTシャツになっていた。おかげで日焼けした。作業服を着るとこすれてヒリヒリする。失敗したなあとと思う。

16時を少し回る。労働時間は17時までだから、用事を言いつけられれば時間までは働く。黒田さんが屋内から手渡してくるものを運んで、捨てたり、トラックに積んだりする。もうこの時は疲れていてしょっちゅう時計を見ていた。「もう5時だ」、「もう終わろう」、「もう終われ」とイライラする。17時を過ぎてもまだ作業は続く。「ふざけるなよ、残業手当出るんだらうな、というより、残業手当なくていいからもう仕事やめさせろ」と思う。

本当に、心底思うのだが、残業手当くれるより、ちゃんと17時で仕事終わって欲しい。いつまで続くか分からない雑業で延長しないで欲しい。疲れる。この辺労働組合とかしかりしてるところだとキチッと終わるんだらうか。サービス残業とかありえないよねと思う。

やっと仕事が終わってトラックに乗り込む。あとは帰るだけのはずだ。まさかと思うがこ

のトラックに乗せた荷物を降ろしにいくとか言わないで欲しい。残業代貰ったとしてもいやだ。「残業代忘れたから事務所に寄らせてもらうよ」

と黒田さんが言う。よかった、残業手当は出るのだ。何だかんだ言って働いた分は貰いたい。30分に満たない延長でもオーバーした分は貰いたい。くれないと嘘だ。

疲れているとイライラする。現場の近くに自販機が無かったせいで今日はほとんど水しか飲んでいないのだ。ジュースの1杯でもおごらんかいと図々しいことも考える。疲れるとキレたくなる。もうお腹も減って死にそうだったし、些細なことでも大声上げて怒る自信があった。教訓。疲れている人間をいらだたせるようなことはしてはいけない。

車がどこを走っているのか分からない。もともと知らない道だ。飯場までどれくらいかかるのだろうか。

やっと飯場に着いた。ブルーシートを洗っていたせいで靴の中はぐしょぐしょだ。とりあえず飯場に入る手続きをしようと事務所に顔を出す。事務所のカウンターの女性から今日の<現金>の分のお金を貰って、<契約>の書類を書く。印鑑とか押さないでいいのだろうか。

労働者の世話係らしいおっちゃんに飯場の中を案内してもらおう。つれていかれた2階の部屋は3畳ほどの個室だった。清酒の通し函の上にダイヤル式のテレビが乗っている。アンテナは室内アンテナだ。このテレビがボロくて、最初は白黒テレビかと思った。あとは扇風機と布団がある。前の人置いていったのか細かいものが通し函の下に落ちている。よく見ると髪の毛がたくさん溜まっていた。……掃除してないだろ、この部屋。布団もシーツがかかっているわけではない。きっと前の人汗が染み込んでいる。めまいがした。

風呂、トイレ、食堂、コイン式の洗濯機が共同だ。食堂にはボードがかかっている。そこに会社名の札がかかっている。19時までに翌日の派遣先の会社名の札のところに自分の名前の札が並べてかけられる。かけられていなければ仕事は休みだ。そのボードの横に食堂から事務所の背後に通じるカウンターがある。そこで仕事道具や生活用品を売ってもらったり、給料の前借りをしたりする。

初日の夕飯はまずかった。変な野菜炒めが冷え切っていた。

風呂に入って部屋でストレッチをして寝た。フィールドノートはほんの少しか書いた。少ししか書けなかった。

## 2003年8月21日(木)

飯場の個室には南京錠がかけられるようになっている。しかし僕は南京錠を持ってきていなかった。事務所で南京錠を売ってくれるよう頼むと貸してくれた。「無くさんよにな」と言われた。めちゃくちゃごつい南京錠。鍵には鈴とプラスチックの札がついている。

風呂に入る時に身に付けていられるように鍵にコンビニで買ったヘアゴムをつけた。

さて今日からいよいよ<契約>労働の始まりだ。やっと始まる。今日の仕事が終わってもあと9日あるんだなあと思うとうんざりするのを考えないようにしようと思う。

携帯電話が目覚ましで5時に起きる。最悪の気分だった。あれだけストレッチをしたのに筋肉痛が残っている。

特に酷いのが腰痛だった。腰のストレッチなんてどうすればいいんだ？あまりのばせないのに。それから腕の筋肉痛もきつかった。腕が細い分いくらストレッチをしても追いつかない気がした。腕の筋肉全部筋肉痛に違いないと思った。

この日は大塚さんたちも〈現金〉で来ていた。

食堂のボードの「本社」という札のところに僕の名前はかかっていた。「本社」って何なんだろう？水場にたまっているおっちゃんたちに聞くと本社の仕事は楽だと言っていた。しかし内容については教えてくれなかった。結局本社が何かよく分からなかった。

この日は大工の白井さんの手元だった。迎えに来るのが遅かったからまた現場の人と一对一の仕事かなと思ったらやっぱりそうだった。仕事の性質として大勢人がいるような大工事は田舎で、田舎だと現場が遠い分迎えも早くなるということだろうか。そうだとはいい切れないがまあそんなところだろう。7時くらいに迎えに来ただろうか。

一对一の現場だと誰かがやっているのを真似するということができないから辛い。それに、もし僕が使えなかったらその日は全く作業が停滞してしまうかもしれない。そう思うと怖い。自分が仕事を知らないことは充分わかっているし<sup>19)</sup>。

車の中で「白井います」と白井さんに自己紹介された。丁寧に自己紹介されたので驚いた。最初はこの人は迎えに来ただけで現場にはもっと会社の人がいるのかと思った。「奈良って本当にお寺が多いんですね」とか他愛ない話をする。途中自販機に寄ってコーヒーをおごってもらう。そう言えば昨日は朝、黒田さんがおごってくれるというのを遠慮したんだよね。

他にもお昼のお茶やジュースをおごってもらったりした。

柱が剥き出しの、建築中の家が今日の現場だった。2階建てで、屋根裏くらいいつているんだろうか。妙な作りの家だと思ったら「伝統工法で作る」が売り物の、有名な建築家設計の家だそうだ。普通の家なら2ヶ月、3ヶ月で建つのだが、この家は7ヶ月かけて作るのだそうだ。作りかけの家を見て僕はもう5割くらい出来ているのかと思ったらまだ1割程度、まだ2週間くらいの作業だと言われた。まだまだまだまだこの家は完成しないのだ。僕が関わるこのたった1日は全体から見ればとても小さい。

建設業の自営業主って大変だ。一つの仕事が終わったら次の仕事を見つけないといけない。7ヶ月もかかると思うと気が遠くなるけど7ヶ月間は収入の保証があると思うと心強いな。早すぎず、遅すぎず、きっちり仕上げる。いやよく分からんけど、僕にはなじみのない世界にいろいろ感じるものがある。

足場の板を剥がすように言われて釘の抜き方が分からずにまごまごしてしまい、別のことをするように言われた時は恥ずかしかった。白井さんが道具を使うのを見て、なるほど、そう使うのかと感心した。道具というのはよく考えて作られている。

「大工の手元か」と最初どうしようかと思ったが、これは勘違いだった。この時、僕は大工と鳶をごっちゃにして考えていた。どちらも高所作業というイメージがあるからだろう。

鷹の手元はきついとよく聞く。

午前中はほとんど掃除をしていた。ノコギリで出た削りカスとか糸くずとかをほうきで掃く。家の周りに落ちた木片やゴミを拾っていた。足場にするベニア板を上げるのを手伝ったり、雑用をしていた。

途中でコミセン打ちという作業をする。ハンマーでモクセンという木の栓を柱と柱の継ぎ目に空けられた穴に打ち込む。途中からハリヤというでかいハンマー<sup>20)</sup>を使うように言われる。

ハリヤを使うのがきつかった。というよりモクセン打ちそのものがきつかった。白井さんがやるとスルスル入っていくのが不思議でしょうがない。一つには集中力の問題がある。白井さんに見てもらっているときはうまくいく。一人でまかされるとなかなか出来なくなる。緊張感による集中力が助けになっているのだろう。もう一つは筋力不足。筋力が無いぶん打つところがずれてしまうのだと思う。あげくコミセンを割ってしまう。

初めてにしては上等だったのだろうか。それともダメダメだったのだろうか。分からない。あまりのできなさにこれはもうここには呼んでもらえないかなと思った。モクセン打ちというのも「伝統工法で作る家」が売りだからやっているだけで今はほとんどやらないことらしい。であれば熟練の手元でもできなかったりする部類のことかもしれない。わからんけど。

2階の方のモクセンは午後からだったと思う。

「とにかく足元だけは注意してな」としきりに言われた。落ちたら怪我するしかないもんな。注意するしかないし。こういう時安全帯は使わないんだな。まあ即座に生死に関わるような高さではないわけだが。

途中で雨が降って大変だった。2回雨が降ったかな。最後にも雨が降って、もう今日はやめようということになった。

この日の仕事でまた少し手元のことを分かった気がする。屋根の板を打ち付けたり、ベニアを2階にあげたりというように、1人ではできないことがある。そういう時に必要なのもう一つの身体なのだ。機械や道具より少し融通の利く人間の身体。誰かいないとできないことをするために素人でもいいから手元を雇う。また、掃除をしていて思った。しょっちゅう掃除をさせられた。これは2人でしなければできない作業がその段階ではないからで、遊ばせておくよりは何かやらせておこうということ。手元というのはそういう存在なのだ。必要な時にどうしても必要な存在だ。

2階のモクセン打ちはきつかった。足場は頼りない、高いというだけで怖い、疲労はたまっている、ハリヤは重い。それに、きりが無い。他に用事の無い限りはずっとモクセン打ちを続けるのだと思うときつかった。ブルーシート洗うよりは意味のある作業だとは思うけどきつい。ああ、意味のある作業ってきついものなのかもしれない。

頭の中に家を作る全工程が入っているというのは凄いよなと感心した。プラモデルだって説明書見ながらでないと作れないのに。……いや設計図はあるのか。しかしあれだけでかいと材料がきちんとはまるようにするのも大変だ。仕事だから絶対完成させないといけないし。

白井さんはタンクトップで働いていた。僕は相変わらず厚手の作業服だった。脱ぎたくて仕方なかったが長袖でないといけないだろうしと暑いのにずっと長袖で作業していた。「暑くないか?」と白井さんが言う。どうも T シャツで作業してもいいらしいと判断して途中から上着は脱いだ。

雨で床下浸水した。大丈夫かこの家と思った。

帰りの車の中で白井さんが飯場に電話して「明日も渡辺くんをお願いします」といってくれた時は嬉しかった。こんな手元として素人の人間でも役に立てる余地があるということを認められた気がしたからだ<sup>21)</sup>。

前に知り合いのホームレスの人たちと飲んでいる時、「明日も来てくれと言われたよ」と言ってよろこんでいるおじさんがいた。誇らしげだったし、周りの人も称えていた。だから「明日も来てくれ」という言葉は言われてみたかった。

帰りの車の中で「奈良っていいですねえ」という話をする。白井さんも賛同して「住むなら奈良やで!」と力強く断言。奈良最高。

休憩時間、白井さんに言われてコーヒーを買いに行った。ジョージアのエメラルドマウンテンを買っていくと「コーヒーはこれが一番うまいな!」「そうですね!」と意気投合。何をやっているんだか、二人で。僕も嬉しかったりするんだよな。

白井さんはいい人だった。格好いいし、器量もありそうに見えた。まあ一日だけの付き合いの中ではどうとでも思い込めるのだけれど<sup>22)</sup>。

## 2003年8月22日(金)

今日も白井さんと仕事だとうきうきしていたのに世話係のおっちゃんに言われて違う現場に行くことになる。舗装の仕事になる。

舗装会社の人に「舗装の経験あるんか?」と聞かれる。もちろんない。三人行くうちで舗装の経験があるのは一人だけだった。舗装会社の方は「社長に怒ったって言っといてな!」と世話係のおっちゃんに言っていた。めちゃくちゃ不安になる。これこそ僕の思い描いていた日雇い労働者っぽい日雇い労働なのだが、こんなアクシデントに巻き込まれる形で行きたくなかった……。

現場まで結構遠かった。1時間半くらいかかった。

現場はどこぞの材木会社の材木置き場で、そこのアスファルトの張り替えだった。アスファルトがめくってあって地肌が出ているところが今日の作業ノルマだろうか。めちゃくちゃ広い。フィニッシャーというアスファルトをまくための巨大な車がある。しかしこの巨大な車が小さく見える。全部敷き終えるのに何往復かかるのか。考えたくもない。作業工程もわからん。しんどい。

現場には同じ会社の正社員の人たちが10人くらいいた。そのうちの1人がこんなことを

言う。「暑いから倒れるなよ。俺たちも病院連れて行くの面倒やからな。倒れたらウンボ<sup>23)</sup>もあるから埋めて舗装するからな。どうせこんなところ 20 年ははがさんのやからその頃には俺は時効や」

まあこれも自分で倒れないように気をつけて働けということを言っているだけなのだがその言い方はないと思う。腹が立ったのは事実。

舗装の現場に限らず、いろんな現場で、ただがむしゃらに働いたあげく、ぶっ倒れてしまう人がいるのだろう。倒れてしまうとその日の日当が貰えないので倒れた本人は働き損だ。しかし、苦勞をするのは雇う側もいっしょである。作業半ばで倒れられてしまうと、病院に運ぶために人手は割かれるわ、作業の進行は遅れるわでかなりの迷惑をこうむる場合もあるのだ。いくらその日の日当は払わなくてもいいと言っても、一番いいのは滞りなくその日の作業が終わることなのだ。わざと倒れさせても何もいいことはない<sup>24)</sup>。

最初水を汲みにいかされた。結構重労働だった。台車か何か使わせて欲しかった。水場まで遠い。

頻繁に休憩を取った。1 時間に 1 回は取っていた。普通は午前午後に 1 回ずつの休憩だ。これだけでも舗装の仕事のきつさを物語っている。舗装の現場はみんながきつい。

午後の休憩中に僕の着ている作業服のことを指摘された。「それ冬服じゃないか？」と言われて「やっぱり冬服だったのか」と分かった。どうりできついと思った。釜ヶ崎の古着屋で買う時に「これは冬服じゃないのか？」と疑問に思ったのだが、まさかこの真夏に冬服を売っているわけもないだろうと思い買ってしまった。服装ひとつとっても僕はアホなくらい素人だ。

どうして飯場なんかにいるのか、リストラでもされたのかと聞かれる。危ういところを適当にごまかす。「飯場に入ってみたかったですよ」と答えると「変わっとるな」と笑われた。一緒に来たおっちゃんたちも笑っていた。ふう。

この休憩の前に一緒に来たおっちゃんに名前を聞かれた。何かと思ったら「人の仕事を見てばかりじゃ分からんぞ。分からんかったら聞け」と言われた。むっときた。分からんかったら聞けと言われても僕には何が分からんのかさえ分からん。スコップだってろくに使ったこと無いんだから（威張ることじゃない）。そもそも僕は別に人の仕事を見ているつもりも無かった。分かっているつもりだったのだ。未だにおっちゃんがなぜこういうことを言ったのか分からない。

思い当たるとすればウンボで降ろされたアスファルトをすくって広げる時の手際が悪かったせいかなと思う。「こっちでやったら邪魔や！」と怒鳴られたことがあったからだ。……いや、確かに同じ未経験者同士と思っておっちゃんの動きを見ることが多かったかもしれない。おっちゃんにすれば自分も分からんのに自分を頼られても困るところがあったのだろう。それはうとうといいな。見るならもう一人の、舗装経験者のおっちゃんの方だ

ろう。しかしもう一人のおっちゃんは別の作業をしていたから参考にならない。だったらやっぱり聞くしかなかったな。

やることが分かっているにもかかわらず自信がなくてためらいがちになるというところがあった。そういう思考自体間違っているかもしれない。とにかくやってみて、間違っていたら指摘されるだろうぐらいの気持ちの方がいいのかもしれない。頭の中で葛藤していても他人から見たらボヤボヤしてるようにしか見えないだろう。

自分で思っている以上に僕は現場でおろおろしているのかもしれない。怒鳴られる時もあり気にしないようにしようと思っていた。「どんなにきつく怒鳴られても自分から帰ってはいけない。帰れと言われたら、じゃあ帰るからここまでの日当を寄越せくらいのことを言わないとだめだ」とか「きついこと言われても気にせんと一日働くことだ」とか飯場に入る前にある労働者から言われた言葉から、失敗をしたり怒られたりしてもとにかく一日働ききって日当を貰うことが第一だと決めていたのだ。

ヘルメットなんかいるのだろうかと思っただけで、後半の作業ではよくユニボのアームに頭をぶつけた。そんなに強くぶつけたわけではないがヘルメットをかぶっていなければたぶんこぶくらい出来ただろう。作業中は周りが見えなくなっている。いったいどれだけ見えていないのだろうか。

身体の使い方が悪いのか周りが見えてないのかペンキが塗られたばかりの鉄骨の周りを舗装する時に上半身がペンキだらけになった。そういうことになったのは僕だけだった。

仕事が終わって、車の中で会社の人を三人で待っているときにいっしょにきたおっちゃんに「今日は足引っ張ってすみませんでした」と謝った。すると「別にそういうふうには思っとらん」と言われてほっとした。スコップもほとんど使ったこと無いというと「初めてやったんならしゃあないな」と言う。この言葉と怒鳴られた時の印象にギャップがある。彼が僕の使えなさに相当忌々しさを感じているように僕は感じていたのだ。これについては今でもよく分からない。

舗装経験者のおじさんは「舗装だけは何度やっても一番きつい」と言う。そういいながらこの人は舗装の現場ばかり行っているそうだ。偉いと思う。

舗装は本当にきつい。一番きついと思う。物凄く暑いのにさらにアスファルトの熱がくる。社員の人たちもきつそうだった。人間身体がきついと余裕が無くなって怒鳴るようになる。手元をやっていて怒鳴られるのはその人がいやな人なわけでもこちらがミスをしているというばかりなのでもなく、その人もきついからだ。きつい時にきついことを言われるが、僕がきつい時には雇主もきついのだ。同じ作業をしているのだから。

帰りに会社の人がおビールをおごってくれた。なかなかアルコールが醒めなくて大変だったけどおいしかった。怖い人だと思っていたが仕事が終わってみるといい人だった。舗装の現場ではこの人も僕たちと同じようにアスファルトの上で仕事をしていた。同じ辛い仕事を終えた同志という共感のようなものがあるのかもしれない。本当、お互い「暑かったなあ」と

声を掛け合いたい気分だった。

飯場に帰って事務所で借りていた安全長靴を返そうとしたら事務の女性に言われた。「今日ごめんな、(世話係の)おっちゃんの勘違いやねん」……しっかりしてくれ。

## 2003年8月23日(土)

本社のところに札がかかっていたので改めて白井さんのところの仕事だと思っていたら吉野の山奥で土工だった。白井さんのところだと思ってのんびりしていたら世話係のおっちゃんに呼ばれてびびった<sup>25)</sup>。他のメンバーは<現金>で来た人が2人と通い<sup>26)</sup>で来ている人が1人だった。

突然だったので食堂から弁当を取ってくるのを忘れたことに途中で気づく。コンビニによってもらおう。お茶と弁当、ウィダーインゼリーを2つ買う。ウィダーインゼリーは1つ車の中で飲んだ。<現金>のおっちゃんがC1000 タケダを買っている。車の中で「これをお茶に入れるんや」と話している。疲れが取れるんだろうか? レモンの蜂蜜付けの要領か?

最初にはったりで土工の経験が3ヶ月あると言ってある。社長もまさか本気にしてはいないだろうがもしこれで土工経験がないことを現場でとがめられたらどうしようと気が気ではなかった。契約違反と言われてしまうかもしれない。現場でまず書類をかかされた。そこに土工経験を書く欄があった。そこは空白にして渡したら確認の時にやはり経験について聞かれた。仕方ないので無いということ言うが、とがめられるということもなく、もう一人の<現金>できたおっちゃんに「教えてやってくれ」と言って同じ場所にしてくれた。助かったと思った。これで1回土工をやったことになるのでまったくの未経験者ではない(まあ次に行っても初心者には違いは無いのだが)。

高台の小中学校の校舎とプールを作る仕事だった。僕がやったのは体育館の基礎作りだ。

東野さんという人に教えてもらう。初心者は熟練者に教えてもらえばいいという日雇いのセオリー<sup>27)</sup>に沿うことができるなと思った。

作業はまずハリの中に碎石を敷き詰めてならず作業だった。石が足りない時はユンボの人に頼んで石を入れてもらう。基礎の部分、土を掘り崩して段々にしてあるところのことを「ハリ」というのだと東野さんに教えてもらった。「知っとけば次行った時はわかるやろ」と言って他にもいろいろ教えてくれた。ハリのくぼみのところに鉄の棒を打つ。その棒のことを「鉄筋」ということ、鉄筋にビニールテープを貼って目印を付ける時、テープの下に基準をあわせることを「したば(下端)」ということ(上に合わせれば「てんば(天端)」である)。基礎のコンクリートを流し込んで固めるために使う箱を「バックン」ということ<sup>28)</sup>。

満遍なく平らになるように二人で碎石を広げていく。石が足りなかつたり、ユンボが石を下ろす位置がずれていたりすると少しイライラする。作業開始場所から作業が終わる場所までが50メートルくらいあつてうんざりした。途中で他の作業にまわされたので結局全部埋

めるのではなかった。しかし、途中で他の作業にまわされることなど最初はわからない。今日は一日穴埋めかと思うとうんざりした。それが手元というものと身にしみるように思ったがやはりつらかった。逆に今日はずっとこの作業をやっていればいいんだと思いついでいるところで別の作業にまわされるのもつらいかもしれない。

釜ヶ崎の西藤さんが言っていた、「一日穴掘りやらされた時はきつかった」という言葉が思い出された。しかし、きつくても土工をこなせば日雇いとして成長できるような気がしていた。土工経験のない日雇いなんて格好悪いと思ったのだ。ここには何か日雇いの世界の価値観のようなものが僕にも反映されているのだろうか。

バツカンをユンボで吊り上げてハリの中に落とし込む。タンクローリーで練ったコンクリートをユンボで受けてバツカンの中に流し込む。時々吊り上げてバランスを見る。この時手元としてはあまりすることはなかった。たまに吊り上げる時にワイヤーをよけたりかけたりしたがそれも手元の僕たちがわざわざ出でいかないほうがいいような段取りに思えた。東野さんは積極的に動いていた。熟練者であるはずなのに無駄な作業をわざわざするのだなと思った。それとも本当はすべきなのだろうか？

よく働くやつだという印象をつけるために過剰にでも動き回っているのだろうか？ そういえば大塚さんと太田さんが言っていた。「1日目は死ぬ気でがんばる。そうすればまた来てくれと言ってもらえる。だから1日目は死ぬ気でがんばる。それで次の日には死んだらいいかもしれないけど次の日のことを考えるよりそもそも次の仕事に行けることが大切だ」。

途中で東野さんは敷き詰めた碎石をプレート（エンジンで底面が振動する地ならしのための小さな機械）でならすように言われた。プレートを動かすのには何か資格のようなものがあるのだろうか？ いらぬような気はするんだけど。どれくらい日雇いをしていたらプレートをやらせてもらえるようになるのだろうか。昨日の舗装の時にプレートを使った作業を見ていたおかげでプレートに対する距離感はあまり感じなくてすんだ。「ああはいはい、プレートですね」という感じだ（何言ってるんだか<sup>29</sup>）。

途中で円柱の中に落ちていた石を落とす作業をする。あの円柱も基礎の一部なのだろう。丸い型に鉄筋を入れてコンクリートを流し込んで作るのだと思う。円柱にはスプレーでしるしがつけてあって、そこまではチッパーという道具で崩すようだ。チッパーでコンクリートや岩などを破碎することを「斫り」（はつり）というらしい。現場の人がチッパーではつって（斫って）崩している傍で崩したコンクリートが邪魔にならないように手とスコップで取り除いていく。これもまたストレスのたまる作業だった。次から次へ円柱を崩していく。あと何本円柱があるかと数えていやになった。

言われてもないのに東野さんは斫りの手元に行った。それはそれで正しかったらしい。斫りをしていくときに作業がしやすいように砕いたコンクリートを取り除いていくというのは割と定番の作業なのだろう。僕も経験を重ねて作業の手順が見えていけば融通を利かせながら動くことができるだろうか。今回の現場は学校という広い敷地の中に大きな建築物がいくつも

立つという作業だったが、一つ一つの作業を見ていくと小さなビルを建てるのと同じ段取りがいくつも集まっているのだと思う。他のいろんな現場で見て、やって経験した断片的なことを現場現場によって取り出し、応用して作業していくのかもしれない。

スコップの使い方があまりうまくないということに負い目を感じる。もっと豪快にやらないと怒られるのだろうかという気持ち、あまり豪快にやりすぎると途中でバテてしまうんじゃないかという気持ち、土工をするときの自分の体力がどの程度であるのかわからないせいもあってためらいを覚えながら作業していた。

スコップの使い方を何度か東野さんに指導された。『こういうふうにはガッガッと効率よくさっさとやっていけ』と言わんばかりに実演してくれた。確かに言われてみればその通りだと分かる。しかし、それが自分で自然にはできないのだ。昔からそういうところがある。小学生のころクロールがなかなかできなかった。クロールなんてバタアシに手を加えただけなのに何故か自分にはまだできないような気がしたのだ。「とりあえずやってみる」という姿勢に欠けている。ああ、でもこれは過去と現在のある事例とある事例を結び付けて「自分の性分」というストーリーを作っているだけかもしれない。

飲料水として斜面下、臨時の階段の横に冷水機が置かれていた。長机の下に冷水機、上にポリタンクがおかれていた。コップ代わりにペットボトルを切ったものが置いてあった。途中でこのコップがなくなっていたので冷水機の配水口に直接手を当てて飲んでいたらユニボの上で休憩している人に笑われた。「その蓋使えばいいやん」と言う。冷水機の蓋？と不思議に思ったらポリタンクの蓋のことだった。

こういう、何か別の用途のものを流用するというのがこの業界にはよくある。ペットボトルを切ったコップからしてそう。これは面白い。僕の認知世界にはないものの見方だ。逆に言うとこの見方・感覚を身につけていかなければいけないと思う。道具というものを僕はどこか既製品のように思っている。はさみ、定規、金槌など誰かがある用途に合わせて作り上げたもの。しかし、何かを何かの用途に役立てればそれはもう道具なのだ。たとえその場限りのものだとしても。「役立てる」とは何だろう。ただ単純にやるのではなく、何か工夫をすることで作業を楽にする。道具を使うということの原点を見たような気がした。

しかし、臨機応変・その場その場で工夫していくというのは僕には少ししんどいのだ。それは作業手順を知らないせいもあるだろう。とにかく言われたとおりに作業をやり遂げなければと一生懸命だ。あと、「自分の持ち物ではない」というところに頭の中に発想の壁ができていくのだと思う。いや、「それをそんなふうに使ってはいけない」という規範にとらわれているところもあるのだろう。「そんな乱暴なことをしてはいけない」とか「そんな粗末な扱いをしてはいけない」みたいな。

昼飯。朝来た時に荷物を置いたところでご飯を食べる。よく見ると日陰を作るために置いてあるこの杓はバツカンだった。流用だ。

ウィダーインゼリーもぬるくなっている。暑い。

隣のバツカンからは先輩後輩のやりとりをしているのが聞こえた。後輩いびりっぽい感じもした。

午後は東野さんと別々になった。

コンクリートの円柱を電動ノコギリで切っていく脇で、掃除機を使ってホコリを吸い取る。近所（といっても谷ひとつ挟んでいる）から苦情が出るとかで掃除機でホコリを吸うようにしているという。

それが終わった後は切った円柱の中に詰まった土を取り除く作業を命じられた。もともとあとで切る部分はコンクリとコンクリの間に土を挟んであったようだ。これも結構時間がかかった。土がどこまで入っているものなのか分からなかったからだ。途中で、思っていたより奥まで土が入っていること、コンクリだと思っていたところが土だったことに気付いて、やり終えるまでには結構時間がかかった。

やりながらこの作業は一体どの程度意味がある作業なのだろうかとか考えた。遊ばせとくのがもったいないからさせとく程度の仕事なのか、必要だがさっさと終わらせるべき仕事なのか。単純で軽い作業なのだがこの炎天下では立っているだけでふらふらする。適当に休みながらクワ<sup>30)</sup> やスコップ、バールで土をほじくりだす。

午後の休憩の時に<現金>で来ている東野さんや東大阪から通いで来ている高木さんの話を聞く。

東野さんは23歳の女性と最近結婚して5ヶ月だと言っていた。親には若い頃勘当されたそう。自分の若い頃は「バリバリ」だったと言う。バイクを乗り回していたとか。身体がなまるから認定<sup>31)</sup>は貰わないと言っていた。妻のためにも頑張らなければいけない、そういう心持ちのようだ。

僕たちが世話になっている飯場は「良心的なほうだ」と高木さんが言う。東野さんやもう一人の人とも高木さんは昔から知りあいらしい。

東野さんは「重機を取れ。そうしたら食いつぶされることはない」と強く言う。「いくつに見える？」と年齢を聞かれた。困った。60過ぎのじいさんに思えるがこういう場合、釜ヶ崎では50歳くらいだったりする。そして、本人は「見た目より年がいつているのに、自分はこんなに働ける」という自慢がしたいのだ。50歳くらいですかということとやっぱり50歳より少しだけ上だった。ふう。

作業再開。時計とにらめっこ。ようやく5時近くなる。別の場所の作業より早く終わったようだった。お茶のポットを運ぶ。まだ氷が残っていて、思う存分冷たいお茶を飲めた。

東野さんが着替えてくるという。「<現金>やから着替えんといかんのや！」と何だか強く言われる。え、着替え持ってきてるの？と少し驚いた。家に帰ってから着替えればいいのか

に。もう一人の〈現金〉の人も着替えていた。

着替えが長くて事務所のプレハブまで迎えに行った。信じられないくらい冷房が効いていてくしゃみが出た。温度差激しいとバテるって。終わっているからいいけど。

帰りの車の中で飯場の社長は女だとか親族経営だとかいうことを知った。高木さんは「女社長」が嫌いなようだ。ここで書類上の社長は「女社長」で、実質的な社長は「女社長」の弟であるということを知った。飯場で「社長」と呼ばれていたのは弟の方だった<sup>32)</sup>。同じところに長くいたらこういう俗な話もだんだん耳に入るようになるのかな。

飯場についたのはずいぶん遅くだった。現場が遠いから仕方ない。

## 2003年8月24日(日)

日曜で仕事が休みなので大学の研究会に行く。「夜には帰ります」と世話係のおっちゃんに伝えて駅へ向かう<sup>33)</sup>。

新今宮で降りて釜ヶ崎で夏用の作業服を買う。やっと長袖のTシャツで仕事ができる。これでだいぶ楽になるはずだと思う。西藤さんのところに寄って話をする。楽しかった。

それから家へ戻ってシャワーを浴びて、学校に行く。研究会。

給料が出たので先輩が焼肉を奢ってくれる。ごちそうさまでした。筋肉になります。あまり遅くなると不安なのでそこそこで切り上げた。

飯場についたのは8時過ぎくらいだったが何事も無く自分の部屋に戻る。風呂は自分の家で入ったからいいだろう。もう寝る。

## 2003年8月25日(月)

材料が入らないとかで本社の仕事がキャンセルになる。「遊ばせとくのももったいないから」と社長に会社の車を洗うように言われる。1000円貰って世話係のおっちゃんといっしょに車を洗う。考えてみれば僕は車を洗ったことが無い。子どもの頃、祖父母の家で車を洗ってワックスをかける父を見ていたことはあるが、自分で洗ったことは無かった。

バケツにブラシをつけて、洗剤に浸しながら洗っていった。本当にこれで洗っていることになるのかと不安になりながら洗う。ここまできるとこれは性分だ。初めてのことに慣れないことに尻込みするだけじゃないか。

洗車中に社長から話し掛けられる。「仕事は慣れたか？」と聞かれ、「道具の使い方とかは分かってきましたけど」と曖昧に返す。慣れたかといわれてもどこまでいったら慣れたことになるんだろうと思う。自分の熟練度を計れないうちはまだ慣れたとは言えないだろう。まだ慣れてないのか、僕は。慣れるとは自信が持てるようになるということでもあるだろう。「分からんことは一緒にいっとるもんきにきけ」「使えん奴よこしよったと思われたらかなわんか

らな」「ボウシン<sup>34</sup>」の言うことよくきくんやで」というようなことを言われる。気にかけてくれているらしい。

そろそろ洗い終わるかなという頃に吉田建設の軽トラが来る。約束していた人がこなかったたので誰か別の人間を都合してくれということらしい。僕が行くことになる。これで1日無駄にせずにする。ラッキーだ。しかし気持ちの切り替えが面倒くさい。仕事があったらあったてきつい、なかったらなかったで不安になる。しかし、仕事がないならないで気持ちは休む気になってだらけているのだ。

車がポンコツでエアコンがきかないとかそういう話を聞きながら現場へ行く。二人きりの現場はやはり少し怖い。ごまかしがきかない。話さざるをえない。気まずい。

民家の裏手の路地の側溝の工事だ。既に穴が掘られてU字溝がはめ込んである。この日の僕の仕事はU字ブロックとU字ブロックの隙間（目地）をセメントで埋めることだ。仕事はゆったりしたものだった。あまり急がなくてもいいと言われたし。奥までセメントを押し込むという手順を一通り説明されたがよくわからなかった。まあ何とかなるだろうと適当に始める。あとでチェックが入るだろうということも分かっていた。

二人きりで話すことも無いので実は大学院生だという話をする。研究のことを話す。日雇いのおっちゃんたちについて話した。日雇いではなく、普通に就職した方がいろんなことを考えても効率がいい気がするがおっちゃんたちは日雇いがいいのはなぜだろうねという話をする。日雇い生活は自由と言うが思い切り不自由な気がするという話。

午後は埋めたセメントがはみ出したのを鉄のヘラでこそぎとっていった。「ぼちぼち急いでください」といわれてちょっとペースをあげる。これもまたどこまでやったものか分からなくてどれだけのペース配分でやればいいのか分からなかった。削ったぶんをほうきで掃く。

明日も来れるかという話になる。先約（白井さんのこと）があるのに約束していいのか分からなかったが、その先約もいったいのくらいきっちりしたものかわからないし、行けるという返事をする。まあいいや。配置は飯場が考えることだろう。折衝は上の方でもらおう。

食堂や風呂で話し掛けられて今日の仕事は楽だったと話す。付き合いの浅い深いは関係なく僕にも話し掛けてそういう話をする。対等な関係というのか、それとも大して関係は深まらないということなのか。わからない。仕事の話くらいしかすることないといえないな。別に昨日のテレビがどうだったとか、明日の講義の話とかするわけでもないし、アイドルの話をするでもないしな。

## 2003年8月26日（火）

晴れ時々雨。

ごはんを食べて準備を終えた頃に雨が降り出す。起きてからずっとやる気が無くて休みな

ら休みでいいと思った<sup>35)</sup>。この休みかどうか分かるまでの時間がだるい。僕と同じように連絡待ちの人たちもみんなしんどそうだった。8時を過ぎるとみんなお酒を飲み始めた。世話係のおっちゃんもビールを買ってきて皆に渡し始めた。こういう関係を作るのも世話係の役割なんだろうか。僕にはくれないんだろうかと思った。欲しいわけではないが仲間はずれはいやだと思う。

「8時半まで待ってこんかったら飯場に入るとき」と番頭さんに言われる。8時半近くなってもう上にあがろうかと思って荷物を手に取ったところで1台のトラックが来た。吉田建設の軽トラではない。昨日の吉田建設のように飛び込みで人を探しに来たように見えた。

世話係のおっちゃんはたまっていた人たちに「〇〇さん行ってくれるか?」と交渉をするがうまくいかない。どうなるのだろう、休みになるくらいなら僕に行かせてほしいと思った。いくら調査になるといってもできるだけ早く飯場から出たいと思ってしまう。きついことは集中的に済ませてしまいたいのだ。結局、階段で鉢合わせた僕に「自分行ってくれるか?」と言ってきたので承諾する。これで「明日も来てくれるか」と言われたところは2回連続行けなかったことになる。どうせ今日は吉田建設の仕事は無いだろうが、こういう約束不履行は先方にどう取られるのだろうと思う。多分飯場自体そういうアバウトなところがあるのだから僕個人を悪く思われるものではないだろうが。

近藤建設の仕事で、雇主は野中さん。作業の説明をトラックの中で受ける。現場は大阪市内の近鉄電車の車庫。仕事はコンクリートの仮枠<sup>36)</sup>外し。経験の有無を聞かれる。もちろんない。わからないことは今のうちに聞けという雰囲気だったのでいろいろ聞く。

うちの飯場を使うのは初めてのようだった。うちの飯場の存在は前から知っていたのか、それとも飯場の場所を聞いてきただけなのか。とにかく何のアポもなしに飛び込みで人夫を出して欲しかったようだ。まあ必要な時に必要な人材を派遣するのが飯場だからこれはありなのだろう。

飯場についても聞いてみる。

やっぱり10日契約くらいだと優先的に仕事をまわしてくれるものらしい。飯場に入っても間もない頃、「10日契約くらいだったら仕事入れてくれるよ」と他のおっちゃんたちに言われた。契約の短い者はもともとお金を貯める気であるから10日の契約期間をできるだけ早く働ききってしまおうとする。しっかり働く気であるから飯場としては派遣させやすいのだそうだ。長くいる者になると働いてお金を稼ぐという目的がくいちがって休みがちになってしまうのだという。野中さんは表で酒を飲みだした連中のことを例に出して言っていた。あとトンコ<sup>37)</sup>するという話もしていた。これは日雇い労働者に定番の話だな。

飯場に長くいる人間は働きたがらない。毎日寄せ場から労働力を仕入れるより飯場にプールしておいた方が使う側、派遣する側としては便利がいい。仕事は確かにないのだと思う。しかし、飯場にいれば仕事に行こうと思えばもっと行けるのではないだろうか。実際社長は

毎朝寄せ場に〈現金〉の人間を探しに行っていた（他に用事があるのかもしれないが）。毎日、何人かは休んでいる人がいたから、その分は飯場の労働力が遊んでいるはずだ。

飯場に入らないと今は仕事が無いという言説そのものは正しいのだろう。だから飯場に入れというプレッシャーはかかるだろうし、労働力のプールがやりやすい状況にあるとはいえる。

飯場というのは労働力をプールしておいて、その労働力を遺漏なく、時には臨機応変に派遣するためのシステムだ。それがうまくいかない場合困るのは飯場の経営者だ。飯場の経営者も大変だ。最初の日、女社長に「〈契約〉で入ってくれるの？ありがとう」と言われて驚いた。「こいつ本当に使えんのか？」という目で見られるのではないかと不安だったのだ。

そういえば今朝、他の人から他の飯場について聞いた。「前日の7時までには休みたいと言わないと休ませてくれない（ひどい）ところもある」という。しかしそれは普通のことなんじゃないだろうか。この辺の意識のずれがある気がする。どういう意味合いの発言として解釈すべきなのだろう。

「暴力飯場」をやるのも大変だと思う。よっぽど人間を無下に扱うのがうまいんだろうなあ。

近藤建設は仕事の始まりは8時半、夕方4時半ぐらいには仕事を終えて5時過ぎぐらいには飯場に戻れるぐらいにタイムスケジュールを調整してくれるそうだ。派遣先としてとても良心的だ。「その方がええやる？」と言われた。それはもちろんそうだ。

現場につくころには雨はもうほとんどあがり、うとうしいほどの晴天になった。

仮枠バラシという仕事がやれるのが実は嬉しかった。日雇いの仕事として何度かその名前を聞いたことがあったもので、1回はやっておかないといけないと勝手に思っていたものだったからだ。まず最初に鉄のピンのようなネジを外すように言われた。外した木切れはまとめて置けと簡単な注意を受ける。ピンを外すのに外したピンと留め金そのものを流用する。いい加減こういう瑣末なことはわざわざ教えてもらわなくても自分で応用できるようになれよと思う。教えてもらうにしても本当に、「技術」とも呼べないようなことじゃないか。バカか僕は。

現場に野中さんがいなかった所以他の会社の人が午前の休みを取っている時も一人で働いていた。これは休んでもいいのだろうか、それとも彼らとはタイムスケジュールがまったく別だと考えるべきなのかと迷った。近藤建設は小さな会社なのだろう。確か三重県に本社があると言っていた。こういう仕事はどうやって手に入れるんだろう。入札とかあるんだろうか。1回依頼された時にできた縁で次の依頼が来るということもあるにはあるんだろう。ああ、それこそ元請、下請、孫請の構造があるんだな。

早く帰れるのは確かに嬉しいけど、午後に休憩がなかったのはつらかった。休憩で労働のリズムを取っているところがあると思う。「もう3時の休憩だからあとこれだけ頑張ればいい」とか「3時の休憩までは時計を見ずに働こう」とか、ペースを作りながら働いている。休憩を取らなかったのはそれだけ作業が押ししていたということだろうか。

そういえば朝、世話係のおっちゃんが昨日洗車代として社長からもらった1,000円のうち500円をくれと言ってきた。あれはもともとそういう金だったのか？それともおっちゃんの権力行為？

野中さんと話していて、世話係のおっちゃんを「番頭」と呼ぶのだと知った。僕が「世話役のおっちゃん」と言ったら「番頭とちゃうんか（笑）」といわれた<sup>38)</sup>。

今日一日で仮杵バラシがだいぶできるようになった。こんなに釘を抜いたのは初めてだ。ハンマー一つでこうも簡単に釘を打たれた板を解体していけるのかと感心した。正直楽しかったな。

飯場で働いていると時折公園での生活を思い出す。おやじさん<sup>39)</sup>は生活のいろんな場面で日雇いをやっていくための技術を伝授してくれようとしていたのだということが今になって分かる。その頃は「ホームレスをやるための技術」だと思っていた。しかし、「ホームレスをやるための技術」としては電化製品の解体はあまり重要に思えなかった。モーターの解体もハンマーやレンチといった道具の使い方の学習と道具を手になじませるという役割を持っていた。そしてその場にあるものを小道具として流用するというスタンスを仕込もうとしてくれていたのかもしれない。あれは明白に「教育」であったのだ。

野中さんはタバコを吸わない人だった。「俺は吸わんけど吸っていいぞ」と車の中で言ってくれた。いろいろと気を遣ってくれるのがなんだかごちない感じがしたのは、やはりそれがトンコ防止という側面を持っていたからだろうか。飯場労働者にへそを曲げられるのを恐れての配慮であるように僕には思えた

仕事が終わって帰る途中、「明日も来れるか？」と聞かれたが、他のところの仕事で「明日も来てくれ」と言われているところがあるからわからない、今日はたまたま雨で休みだっただけだろうからと答えた。実は仕事をやっている途中、今までのパターンだと明日も頼むと言われるなと思っていた。自分の働きぶりというのはろくなものじゃないと思うが、それでも僕の方が使いやすいというところがあるのだろうと思った。いや、でも待てよ？そもそもこの場合初めてうちの飯場から人夫を借りたわけだから、同じ現場の同じ仕事の場合同じ人間を使う方がいいというだけの話じゃないだろうか。僕が決定的なミスをやらかしたということもなかったわけだし。

とりあえず明日は雨で中止かも知れないのでまた電話すると言っていた。

帰りの車の中ではあまり会話がなかった。

食堂で遠藤さんという人（入寮者）から「楽しんで働く」ためのレクチャーを受ける。この人は僕の顔を見ると「手帳（日雇雇用保険被保険者手帳）とったか」という。まだ労災が残っているのだから働く必要がないのだと言う。しかし退屈そうで哀しそうにも見えた。休みだと言ってもみんな働きに行ってるわけだし。保険を使っていかに楽をするかということ語っ

てくれる<sup>40</sup>)。「賢いやろ?」「悪賢いんや」という。なんだか悪いこと以外には賢くないという風にも聞こえた。「頭使って楽をせんといかん」とのこと。この人は仕事の話をしないな。他の人とは今日の仕事はどうだったとかそういう話をするのにこの人とは保険の話ばかりだ。正直「それしかないのか」と言ってやりたくもなる。

アブレ手当て(日雇労働求職者給付金)をもらえるくらいには仕事に出られるように飯場も考えてくれるそうだ。この飯場ではこれは重要な信頼関係なのだろう。

僕がこの飯場に入るために世話をしてくれた大塚さんも今日から飯場に入ったようだ。僕の部屋の隣の隣くらいが大塚さんの部屋になったようだ。どうして飯場に入ることにしたのだろうと不思議に思う。いつもつるむ仲間がいるようだし、飯場があまり好きではないタイプだと思っていたから。

番頭のおっちゃんが突然扉を開ける。何かと思ったら「服あるんか?」と聞く。「ズボンがあると助かります」というとニッカズボンをくれた。ちょうど大塚さんが通りかかって「何や服も持ってないんかい」と馬鹿にして笑う。僕も笑う。おっちゃんも笑っていた。自分が着ているのが冬服だと知った22日の舗装の仕事の後、作業服を売ってないかと食堂のカウンターで尋ねた。すると女社長が番頭さんと呼んで古着の作業服を部屋まで持ってきてくれた。見事な見立てでぴったりだった。

おっちゃんよく見てるんだな。何も言ってないのに服のことを言ってくれた。そしてちょうどありがたかった。

## 2003年8月27日(水)

雨のち曇り、晴れ。

2度目の吉田建設だ。呼ばれた現場に初めて続けて行くことが出来た。昨日のことを聞くとやはり昨日は中止にしたらしい。途中から晴れたことを社長が悔しがっていた。

一列に連なったU字溝の両端に排水溝がある。いずれはコンクリを入れて枠をはめたりするのだろう。まだ裸のパイプが土に埋まって見えるか見えないかという状態だ。そこをスコップやクワを使って掘った。大きいスコップと小さいスコップと使い分けが難しい。ここでも僕はどちらを使ったらよいかまごまごするのだった。「正しく効率よく使用しなければならない」みたいな思い込みがあるんだろう。「身体をうまく使えない」という一目瞭然の駄目っぷりをさらすのが嫌だという自意識があるのだと思う。ださい。

今日は昼前に倒れかけた。「暑かったら扇風機使いや」と言われたが曇りだと思って油断して使わなかった。そしたらふらふらきて、これはやばいと思って休ませて貰った。ちょうど休憩時間(午前10時)の前だった。

「だから扇風機使いなさいと言ったでしょ」と言われた。「バカじゃ土工はできんのですよ」と言われて少し恥ずかしかった。

倒られるよりは扇風機を活用して倒れないように気をつけてもらったほうがありがたい。倒られる方がガソリン代より高くついてしまうのだという。

休憩のあとは扇風機を使いながら作業した。発電機を始終回しておかなければならないというのは結構ストレスだ。あのうるさい音がいやだ。時に大きくなったり小さくなったりする。指示の音が聞こえなかったりする。

昼飯休憩。1日目の時、社長はどこかにごはんを食べに行った。今回は弁当を買って戻ってきた。そのついでに「氷晶」という凍らせたジュースを買ってきてくれた。それで首の後ろを冷やした。グレープフルーツジュースは血圧を下げる効果があるのだということを教えてもらう。土工をした時、おっちゃんたちがレモンを摂っていたのはそういうことだったのかと言うとレモンでは駄目だと社長は言う。

おっちゃんたちは「言ってもわからない」と社長は言う。扇風機を使えといっても絶対に使おうとしない。その挙句当然倒れてしまう。「使いにくくて仕方ない」「自分で自分の首を閉めているのに気付かない」のだと言う。その点僕はまだ言われたら改めるから「マシ」らしい。

午後は土嚢袋に詰めた土をトラックに積んで捨てて行った。僕が午前中に掘った分の土と僕が来る以前からつめてあった土。「骨材」と書いてあるものだけは残す。土とコンクリートを砕いたものと二種類あって、それぞれ別々の場所に捨てる。アスファルトもあった。

処分料を払って引き取ってもらうようだ。捨てる場所は通勤路の途中、川沿いにあった。ジュースを買う。普通の土は会社の倉庫の脇の道に捨てた。農家の人に了解をとっていつも捨てさせてもらってるみたいだった。

土を捨てる時に少し軽トラを運転させられた。ペーパードライバーだということは言ったのだが「何でもとりあえずやってみないと身に付きませんよ」ということだった。

学校が無くてヒマな時にはまたバイトに来ないかと誘われた。「今あなたがもらっているくらいのお金は出せるし、奈良駅の近くに事務所があるから奈良駅に来てもらえばいい、いちいち飯場に帰ったり、早起きしたりという必要もないし」と。飯場を通せば飯場に払う手数料というものが発生する。それを浮かそうというのだから、家庭教師の派遣会社が個人契約を禁止するのと同じ理由で裏取引だ。飯場を通さなければ3,000円か5,000円か、もしくはそれ以上のお金が浮くはずなのだが、「同じくらいは払える」とさらっと言う。吉田社長はなかなか食えない経営者である。

仕事が終わって「ちょっとよらせてもらっていいですか、積みたいものがあるんです」というのででかい倉庫による。どこかの鉄筋屋の倉庫のようだった。そこで畳くらいの大きさの鉄板を軽トラに積んだ。掘り返してある作業中の道路のふたにするようだ。

明日も7時半くらいに迎えに来るとのこと。今日は一日おろおろしていた気がする。1日目と社長のキャラクターが違うように感じたからだ。作業内容もいきなりきついものになった。面食らった、と言うのだろうか。

風呂に入って2階にあがると廊下で大塚さんを見かけた。身だしなみをととのえているよ

うで声をかけにくかったので黙って部屋に入ろうとしたら怒られた。「一日働いたあとにお疲れ様とか今日どうやったんかという言葉もないんかい」と言う。いつもふざけ半端な人なのでまた冗談かと思って「今日どうだったんですか?」と軽く聞いてみたら「もうええわ!」と怒る。今日は現場で何かいやなことでもあったんだろうかと思う。わからない。

近所の自販機にタバコを買いに行つてその帰り道、大塚さんとぼったり出くわしてしまう。「またお前か」って、仕方ないでしょう、一本道なんだから……。 「小学生からやり直せ」「こんなこと初めて言うわ。今までいろいろ大学生見てきたけどな、もっとかわいげがあったわ」とまくしたてられる。すみませんとあやまると「すみませんじゃない」と言う。わけがわからない。

長い間飯場にいとこういうふうになんかよく分からないいさかいから気を遣わないといけなことがでてくるのかもしれない。最初は、干渉されることもなくて思っていたより居心地がいいと思っていたけど、それは僕が無神経だっただけかもしれないと思ひ始める。

鶺鴒さんの本<sup>41)</sup>を思い出す。劇団の中で理不尽な怒られ方をした話。

それから2年前の夏の西成公園でのおやじさんとのことも思い出す。何をそんなに怒られるのか分からなかった。結局僕はあの頃とあまり変わっていないということだろうか落ち込む。

洗濯機が空くのを待っていると社長に話し掛けられる。「どうや、なれたか?」「きつかったらまた言いや」と言う。こういうふうには社長が仕事のことを飯場にいる人たちに聞いていることがある。ちゃんと配慮していると思う。わけがわからないまま怒られて気分が重くなっていたので社長の一言はありがたかった。

## 2003年8月28日(木)

というわけで今日も吉田建設。

仕事中は曇り。昼に少しばらついた。夕立があり、夜に降り出した。今日は太田さんも<現金>で来ていた。確か飯場に入って次の日の朝も大塚さんと太田さんは来ていた。彼らもこの飯場から仕事をまわしてもらうのは初めてだと言っていた。うまく続けて使ってもらうことができたのだな。

行きに会社の倉庫に寄ってカラーコーンにかけるバー(カラーバー)とコンクリートを混ぜる機械(電動ミキサー)、「工事中」の看板2枚を積む。

倉庫から現場に向かう間、建設業界にはびこるピラミッド構造について話してもらう。入札の不平等、談合。最初談合というのがそんなに影響力のあるものとは思わなかったそうだ。自分も談合してれば大丈夫かと思つたらそんなに単純ではなく、やっぱり他のところもしているから単に根回ししただけでは無理なのだそうだ。暴力飯場だとかケタオチ飯場だとかいうのが大きく見れば飯場の経営者なんて末端の末端に過ぎないのだと言っていた。

値段をつけることができるということは実は権力なのだと思わされる話もした。

昨日の続きを午前中にした。憧れのチッパーを使い、斫り（はつり）をした。こんな使い方をしていいんだろうかと迷ってしまう。結果あまりチッパーを使わずにスコップを使っていたら「ある道具は使いなさい。なるべく疲れないように考えてください」と社長が言うのでチッパーをとにかく使う。下に通っているパイプを傷つけないよう注意しろと言われる。チッパーを使ってマンホールの方へ掘り進んでいくがどうもうまくいかない。でかい石がある。何をどうやっても砕けなかった。

剣スコと箱スコ<sup>42)</sup>を使い分けるといことも考えなければならない。

軽トラに土を積む時に社長に箱スコの使い方を指導してもらった。僕がやるとあまり土をすくえない。これは土の山に突き刺す時の勢いが足りないためだったんだと思う<sup>43)</sup>。平らな面の上の土をきれいにすくうのはまだ自信が無い。前に舗装の時も何度かやってみせてもらったがよく分からなかった<sup>44)</sup>。

午後はもう一方の排水溝の基礎を作った。木で仮枠を作るのを手伝った。明日はコンクリートを入れるのだろうか。

仮枠に穴をあけたり余分なところを切ったりして溝にあわせる作業を手伝う。マンホールの中に入って砂利を取り除いた。マンホールの中は少しひんやりしていた。臭い。汚水が流れている。電動のドライバーはインパクトドライバーと言らしい。インパクトドライバーにドリルをつける。仮枠を円状に切り抜くためにふちにドリルで穴をあけていく。基準となるふちの線は木切れの両端に釘を刺した流用コンパスで社長が書いた。

丸く空けた穴にあうようにボイド（紙の筒）を切ってはめる。体裁を整え終わったあと、出来上がった仮枠を排水口に入れる。試行錯誤の末に何とかはめ終わる。土嚢袋で固定する。

仮枠を作る手元は大変だった。今日はずいぶん怒鳴られた。道具の名前がわからない。関西弁で怒鳴るな。わからん。社長の作業の進捗状況を見て、次に必要な道具を用意して手渡すような機転が手元には必要なのだとうすうす分かり始める。

手元の人間は職人（実際に作業する人）のもう一つの手、もう一つの眼、もう一つの足のようなものなのだ。次にあの道具がいる、今これから手が離せないがあれをちょっとこっちに持ってくるだけで何とかなるのに、そういう時に絶妙なタイミングでサポートをする。そのサポートをさせるために雇う。

今日も少し車を運転させられた。明らかに僕にやらせるためだけにやらせている。もちろん、長期的に見た場合僕も軽トラを動かせた方がいい。例えば数メートルでも。そのくらいの小さなことをやるのが手元だとも言えるし、それくらいの小さなことでもできるとできないとでは大きな違いがあるのだろう。

飯場に帰って風呂に入る。風呂に入っている時に先に入っていた人が僕の全身のあせものことを指摘してくれた。2日前くらいから全身に湿疹が出るようになっていたのだ。これは職業病みたいなものなのだろう。「薬を塗っとかんとどンドン酷くなるで」とアドバイスを

くれた。

風呂に入ったあと、昨日の大塚さんが何故あんなに怒ったのか、その理由に気付いた。昨日も僕は同じような時間に風呂に入っていた。それは現場が同じだからだ。怒られたのは僕が風呂から上がった時だ。その時、大塚さんは服を直していた。仕事から帰って初めて部屋に入る時は入り口の前で着替えて土を落としてからの方がいい。そういうふうになっている人を他にも見たことがある。大塚さんたちの仕事は土工だと言っていたからおそらく僕も1度行った山奥の現場。あの2時間近くもかかる現場だ。現場が遠い時のうんざりする気持ちは僕にもわかる。仕事内容もきついだろう。それが終わって疲れきってやっと帰ってきたところに風呂上りでゆっくりしている人間が来て、おつかれさまの一言もなかったらそりゃいい気はしないだろう。

ようやく納得がいったので改めて大塚さんに謝ろうと決める。ちょうど上にあがると大塚さんがいた。「おつかれさまです…現場遠いんですか?」。返事を聞くとやはり考えた通りだということが分かった。「大変ですね」「昨日はすみませんでした」みたいな感じで謝る。「分かってくれたらええ」と言ってくれた。「その気持ちを忘れるな社会学部」<sup>45)</sup>と言う。仲直りできてほっとした。

## 2003年8月29日(金)

今日も吉田建設。いつもより一回り大きいトラックにユンボを積んで現れる。波乱の予感だ。行きの車の中で昼休みに塗り薬を買いにいかせてもらえるようお願いする。

今日はよっぽど急ぎの仕事なのだろう、コンビニでいったん僕を下ろして先に現場に向かった(現場はコンビニから近い)。

今日はガードマンのおじさんが1人雇われていた。彼も僕と同じような立場だ。ユンボを使っている間の交通整理が彼の仕事だ。しかしこの人があまり役に立たなくて社長が僕に「ガードマン怒れ!」「怒鳴ったらんかい!」と言うので困った。60過ぎのおじさんを怒鳴れない。僕と彼は雇用上の上下関係はないし。……というより社長の剣幕に僕はびびってとまどっていた。

近所の家から電源を借りる。この日は発電機を持ってきていなかった(これは失敗だったようだ)。

午前中、休みなしで道路入り口の溝からマンホールまで掘ってパイプを埋めた。きつかった。僕はほとんど見ているだけだったのだが社長が殺気立っているので疲れた。何とか午前中でユンボを使った作業は終わる。水道局の人がつけていった水道管が通っているはずの場所の印が間違っていた。「アホー!ちゃんとみとかんかい」と怒鳴られてなんのことも分らなかった。ユンボを水道管にひっかけてしまったのだった。

水道管を見つけられなかったのを僕のミスだというのはちょっと言い過ぎだと不満もあるのだが、つまりはそれくらい神経を使っていたということだろう。

ユンボで掘った土はトラックの上に降ろした。この土を最後に元に戻す。掘った溝に合わせてトラックを前進させたり後進させたりという作業をやらされた。うまくいかず、結局、社長がやった。坂道発進がだめだった。「免許返してもらわんと」と言われた。

荷台を起こして溝に土を降ろす。ちゃんと埋まったかどうかを見なければいけないところを僕は荷台がちゃんと溝の近くまできているかどうかを見るのだと勘違いしていて怒られる。まだまだ作業の流れがわからない。当たり前と言えども当たり前だが。どうしてここまでわからないんだろうと自分で自分がいやになることもある。

溝にいっぱいになった土を踏み固める。土嚢袋をふちにあてがい、鉄板をかぶせる。これでひとまず完成。

僕がバテた日とこの日は工事の発注者である奈良市の職員が見に来た。2日目の時、図面を見ながら、建設局の連中が図面を出してくるのが遅い、そんなに時間がかかるなら私にやらせろと思うと言っていた。確かに公務員の仕事は現場の仕事に比べるとずいぶん楽そうに見えた。

午前中休みなしでぶっ続けでようやく終わるがもう社長はバテバテだった。とりあえず昼食休憩。昼食休憩が終わったらぼちぼちでいいから溝の中を掃いてゴミを取って欲しいということ僕たちに言付け、社長はユンボを返しにいった。

ガードマンのおっちゃんといっしょにほそほそとご飯を食べる。

近所の薬局に塗り薬を買いに行く。薬局のトイレで自分の顔をみたらなんともボロボロな顔だった。汗まみれで髪はボサボサで日焼けしている。でもこういう普段の自分との落差は面白い。

社長は昼食の時にビールをあおっていた。もういやんなるくらい大変だったのだろう。

午後は社長がバテてほとんど何もしなかった。社長がしたのはユンボを載せていた車をいつもの会社の軽トラに代えに行った程度でろくに指示もなく、やつつけでやっているようだった。やたら休憩していた。

ゆるゆると社長が仮枠を作るのを手伝った。もともと通っているパイプがあってそれと仮枠とをあわせるのが大変そうだった。もう誘導の必要は無いのでガードマンのおっちゃんは帰っていいと社長は言ったのだがそうはいかないというので軽作業を手伝ってもらった。

社長に言われてボイドを切る。切断面にラインを引く。丸いボイドに線を引くのは難しい。のこぎりで切るのも一苦労だ。「紙というのは一番切りにくいんですよ」と社長が横から言う。ガードマンのおっちゃんに手伝ってもらう。

サンダー（電動のこぎりのこと）の刃の交換がうまく出来ない。押すべきところ（ストッパーを解除するボタン）を押していないせいだった。単に刃を回すだけでは駄目で小さなボタンを押しながらでないと刃は外れない。もうちょっと教えてください……。

「あなたの方が私より頭はいいはずなんですよ」といやみを言われる。

社長に言われて道具を片付ける。ガードマンのおっちゃんを使って片付けるように言われ

る。ついでにあとで土嚢袋を積むからそれがちゃんと乗るように考えて乗せるようにという注文もつく。頭を抱える。ガードマンのおっちゃんを使ってやるように言われるが、何をしてもらったものやら。「人を使うのが一番難しいんやで」と横から社長に言われる。なんだかやたら鍛えられている。

仮枠作りは完全には終わらなかったようだった。土曜日は休みだというから月曜日にはいよいよコンクリを入れるのだろう。

「機械というのは偉大ですねえ。あなたがスコップで一生懸命掘ったところを半日で掘ってしまえるんですから」と帰りに社長が言う。おととい手掘りしている時に大きな石が出た時点でもうユンボを使うしかないかと思ったようだ。その石はチッパーでも壊れなかった。ハンマーで殴っても駄目だった。そこでユンボを使うことを考えたのだろう。できることならあそこは鉄板をかぶせて全部手で掘っていきかかったのだそうだ。この現場でユンボを使うには通行止めにしなければならない。通行止めにする場合、届け出が必要になる上に、警備員を雇わなければならない。ユンボのリース代もかかる。手間もお金もかかってしまうのだ。

帰りがけに倉庫で土を捨てる。土嚢袋のまま捨てていいと言われたのでそのまま捨てる。倉庫につく前に社長がビールを買ってくれる。「まだ土を捨てるんじゃないんですか？飲んだら仕事に差し支えると思うんですけど」と言う。「飲んでしまったらいいんです、飲んでしまったら勝ちです！」と言われる。それで飲む。半分酔っ払って土を捨てる。社長は飲酒運転だ。この業界では飲酒運転当たり前なのかもしれない。罰金値上げされたのに……。飲まなければやってらんないというところがあるし、そういう時が多いんだろうな。

## 2003年8月30日（土）

今日は休みだと思っていた。朝、番頭のおっちゃんに「社長が呼んどる」と言われて下に下りる。「仕事行けるか？」と社長に言われて仕事に行くことになる。番頭のおっちゃんがお茶を汲んできてくれた。この時、何だ、食堂の冷水機のお茶汲んでいっていいのかとやっとわかる。毎朝コンビニに寄ってもらってお茶を買っていた。

大洋建設。61歳の人との仕事。

飯場の近くに倉庫として空き地を借りているらしい。ゴミがたまっている。トラックの荷台のゴミを降ろす。ゆったりしていた。今日の仕事はそんなにきつい仕事ではないらしい。

今日は枚方市と高槻市と2ヵ所で仕事があるのだそうだ。大した仕事ではないが現場が遠いから時間がかかるという話を聞く。最初の現場へ向かう途中で過去の職歴を聞く。問わず語り。

20歳の頃、実家の農家を出ててんぷら屋をはじめ。水商売の女の子がよく買っていったという。23歳の頃、「いいとこ」の女性と恋愛をして、結婚しようとしたが家柄がどうかという理由でできなかった。でもその人とは今もよい話友だちだという。

漬物を売ってずいぶん儲けたり、株をやったりして28歳で家を建てたとか。漬物は台湾

にまで仕入先を開拓したようだ。

10年前はトラックで、枚方市内で野菜の露天売りをして儲けたそうだ。今日のトラックはそのころから使っているものなのかもしれない。はじめは自分だけが露店を出していたのだが、どうしたわけか他の人間も出すようになった。儲かっていたがもうそろそろ規制されるかなという頃に自分は手を引いたのだと言う。

現在、副業で観光地のみやげものの指導員をしているという。特産品としての魅力の出し方を自分は分かっているからといていた。他には左官屋と植木屋もやっている。奥さんもまだ働いていて20万の収入があるという。聞いていて楽しい。こんないろいろやっていて凄い、面白い人が普通にいたりするのだなと感動した。

息子たちもいい大学を出ていい職についているようだ。娘がベルギーににいるという。旅行会社に勤めていてその関係で海外赴任。ベルギーが気に入って帰ってきてくれない。結婚もしてくれない。まあ本人が楽しくやっているよだから仕方ないかと言っていた。年に1回は奥さんとベルギーに行ったりしているそうだ。

若くてヒマのあるうちに大型免許なり、資格をとっておくことをすすめられる。大型免許は年をとって絶対に役に立つ、年をとるほどありがたみがでてくるという。今は個人で商売をするにはよくない時代。税金が高い。でかい会社に入るのが一番だという。

最初の現場では家と家の間の土をとって碎石を入れる。水はけが悪いので改善措置とするようだ。

あまりにも楽な仕事なのでまた裏があるのではないかと思ってしまう。多分僕は二つ目の現場のために雇われたのだろう。最初の現場はそもそも僕がいなくても事足りていたはずだ。それでも半日だけ使うということはできないからついでに手伝いをやらせておいたのだろう。

現場でいっしょだった人(36歳)と一緒に近くの大型工務店に碎石を買いに行く。車の中で話す。「自分ずいぶん若いな」というお約束の話になったので研究のことを説明する。

「日本はこれからどうなるんやろうなあ」と彼が語り始める。「今真面目に働いている働き盛りのもんはみんな日本はろくでもない国だと思っている」という。大林組、竹中工務店などのゼネコンを頂点としたピラミッド構造(重層下請制度)について言っているようだった。いくら働いても働きっぱなし。政治家がだめだ。政治家になりたがるのは金が十分にあって、あとは名声という金で買えないものが欲しい人間だけだ。研究するならそういうのをどうにかする研究をしていってくれと言われる。

大洋建設の人も言っていたが建設業界の下請業者は現状に本當にうんざりしながら頑張っているようだ。

飯場の日雇いのおっちゃんたちについての印象も語ってくれた。「本當に仕事できる人はおるで。でもそういう人でもずっと同じ現場にはおらん。休みよる。保険あるやろ?」という。

枚方市での仕事は程なく終わり、高槻市へ向かう。途中建設中の新興住宅地がある。初日

の仕事も新築の住宅地だった。こういうの多いんだろうか。「こんな田舎に家を持つとうんていう人間の気が知れない」とおっちゃんがいう。自分は駅の近くに家を構えてとても便利だと言う。

高槻市の現場につく。やはり新築の住宅地。仕事は半ば完成している家の床の保護板剥ぎ。剥いだ板を壁に何度かぶつけてしまう。やばいなあと思いながら気をつけるがやっぱり危なっかしかった。僕は空間を把握する能力が低いのではないだろうか。

新築の家の中でごはんを食べる。

板を剥いだのは2軒だけ。楽な仕事だった。「楽な仕事だ」とおっちゃんも最初から強調していたとおりで。しかし2軒目の庭先がまだ工事中で、ユンボが動いていて出入りがしにくかった。屋内は障子を貼っている途中だったし。おっちゃんのイライラが少し見えた。

倉庫にコンパネや資材をしまいにいった時に息子夫婦や孫の話を聞く。孫たちはおじいちゃんの財布をあてにしているだけだという少し後ろ向きな言葉を聞く。今の生活に完全に満足しているということではないようだ。行きの車の中では悠々自適な人生みたいな語りだったのだが。自分は幸せであるというストーリーを他人に語る満足感というもの人間にはあって、しかし実際にはそれが誇張を含んでいると語りきれない。疲れてくると人間は弱音を吐いてしまう…ということかなと思う。

楽な仕事には違いないのだがやはり終わる頃にはバテた。

トラックの荷台に載せた荷物をロープでくくった時、くくりかたを見せてもらった。一人で今やれと言われると心細いがなんとなくは覚えている。

仕事をしている途中「明日も出られんか」とおっちゃんが上の人に言われて断っていた。「前日に、しかも日曜にいきなり出てくれなんていうやつがあるか」と怒っていた。

最後に倉庫に資材を置きに行って帰る前に工事全体の事務所にある自販機でサイダーを買ってもらう。「汗かいて仕事したあとの炭酸はこの、そのままの炭酸飲料がいいですね」とおっちゃんとわかりあう。本当にうまかった。家の前の自販機の売上げがいいという話を聞く。なんか、観光施設が近くにあって観光客がよく買っていくんだそうだ。

帰り道の話はもう単なる身内自慢・知り合い自慢にしか聞こえなかった。警察署長の知り合いが何人いるとか。そういう話好きな人いるよな。年取るとそうなの？

帰り道は途中から凄く混んでいた。「このトンネルができて〇〇間は楽になった」とかいいう話を聞くが土地勘がないのでわからない。適当に相槌を打つ。道沿いのラブホテルについて「こんなみんなに見られるホテルには入りたくないなあ」と言っていた。確かに入りたくない。

おっちゃんは途中で物凄い迂回をしはじめた。本当に大丈夫かよと凄く不安だった。道が混んでいて不機嫌になって荒々しくなるおっちゃんがわかった。運転も荒くなる。

おっちゃんが最初に言っていたとおりで、現場から飯場までが遠くて、帰り着いたのは6時

過ぎ、仕事が終わって2時間くらいたっていた。

風呂場で大塚さんといっしょになり、男同士の裸の付き合いだ。あと1日で満期だということ告げる。「手元が一通り出来るようになるには5年はかかる」と大塚さんは言う。「講師になれ！」「彼女を幸せにして自分も幸せになれ」とちょっとくさいことをいう。でも嬉しい。

2階の入り口を入れてすぐの左手の部屋は広くてクーラーがついていて、たんすや机などの生活用品もある。少し若い感じの人がいる。どういう立場の人なんだろうか。他にも設備はそこまでではないが広い部屋がある。どういう人が広い部屋に入れるんだろう？契約期間が長い人だろうか？

これで<契約>はあと1日だ。月曜日仕事に行けたら仕事から帰った時点で精算できるようにしておいて欲しいと伝えてくれと番頭さんに頼む<sup>46)</sup>。

明日は日曜だ。仕事は一応無いことになっている。無くていい。何も無い休日を1日ぐらい過ごしてみたい。

## 2003年8月31日(日)

朝、8時半にごはんを食べに行ったら食堂のおばちゃんに怒られた。「もう8時やで。おばちゃん帰るよ！」

みんなもっと早い時間に朝食を取るんだろうか。休みだというのに。それとも休みの日は朝食をとらずに寝ているんだろうか。

誰とも会わない。みんな何をしているんだろう？

午前中は近所の寺にいった。奈良は寺だらけだ。入場料500円もとられた。世界遺産らしい。みやげもの売り場を見るとあの手この手で金儲けしようとしているように見えていやだった。

お寺自体は面白かった。いろんなしかけがある。宗教ってある意味レジャーだなと思う。

昼、食堂でいっしょに舗装に行った人に話し掛けられる。「昨日は現場遠かったんか」と言う。どうして知っているんだろう。結構見られているんだろうか。「明日は満期で帰ります」と言う。「飯場におるんはきついかな」と笑っていた。何か知らんけど仲間意識を自然にもちうるような空気があるみたいだ。

近所のファミレスでドリンクバーだけで3時間くらい居座って本を読んだりフィールドノートをつけたりする。飯場の部屋は暑くていられなかった。考えてみれば日中の飯場に居たのはこの日が初めてだった。みんなクソ暑い飯場にいるのは嫌なのだろう。パチンコ屋にでも行っているのだろうか。競艇もあるらしいし。ギャンブルというのは勝ち負けはともかく手軽な暇つぶしだと思う。他の人の休みの過ごし方を聞ければよかったな。

## 2003年9月1日（月）

最後の日。最後の吉田建設。「今日で満期です」というのを伝えるのが心苦しかった。この日の仕事は吉田建設でした仕事の中で一番きつかった。休む間もなし。

夜身体を冷やしてしまったのか軽く風邪気味だった。休み明けということもあるのか気持ちが悪くきつい。そういえば24日の日曜の朝、食堂でたまたまいた人と「休みの日だと気が緩むのか、疲労が一気にきますね」「気が張ってるからな」という会話をした。前の日は「まだまだいけるな」と思っていたのがいざ休みとなるとかなりきつくなる。

今日は憧れのコンクリ打ちであった。

途中から僕がコンクリを作る役を任された。セメント・水・碎石・砂の順でミキサーに叩き込む。できたらミキサーを傾けてバケツに受ける。午前中に奥のほうの排水口を仕上げた。感無量。しかしまさかとは思うがもう一つの排水口も今日やるつもりだろうかと不安。

体調が悪いせいでふらふらする。社長に心配されたがまさか風邪気味とはいえない。熱中症のふりをする。昼食の時に僕のためにグレープフルーツジュースを買ってきてくれた。血圧を下げるために配慮してくれたのだろう。

昼食のあと会社の事務所に行った。どうして事務所に行くんだろうと思ったがこれは僕の体調をおもんばかってくれたのだと思う。

事務所によってのんびりしていたので、今日はコンクリはもうやらないのかなと思っていた。甘かった。

仮枠を完成させる。するとやっぱりコンクリだった。午前中の最後に碎石をトラックに積んでいた。碎石を積んだまま帰るわけがない。どう見ても午後のコンクリ打ちの準備だ。読みが甘い！

午後は完全に僕だけでコンクリを作った。「固め」とか「やわらかめ」とか言われても困る。いくらコンクリを作っても「まだいる」「まだいる」でいつ終わるんだろうかと気が遠くなった。水をポリタンクに汲みに行くのがつらい。僕も手元が欲しいと本末転倒なことを考える。急がないと時間がなくなってしまう。時間内に仕上げなければいけないという社長のプレッシャーを僕も感じた。

めちゃくちゃきつかった。

コンクリ打ちが終わって「これで土工の仕事は一通りやりましたね」と社長に言われて、え、そうなの、とびっくりした。それが本当ならちょっと嬉しい。

手前の排水口の周りに黒と黄のロープを張る。電柱のワイヤーのカバーの中に蜂がいて、適当に払おうとした社長が襲われて凄い勢いで走って逃げていた。そういったまとめの作業をしながら社長が言う。

「吉田建設の仕事はきついんですよ」

そうなの？と思う。あまり比較対象を持たない僕としてはなんともいえないのだ。「この程度できついか言っただけはいけない」と自分を律しているところもあったし。

「だってこの現場だけであなたで4人目なんですから」

という。

道具を片付けている時、発電機を一人で持ち上げて軽トラにつんだら「筋力がついてきたね」といわれた。そうなんだろうか。単に身体を使うということに慣れてきただけだと思っていた。でも実際筋肉はついたのかもしれない。

帰りにビールを奢ってもらう。飯場に戻ったら給料貰って荷物まとめて大阪まで帰らないといけなからと遠慮したのだが、「今飲まなくてどうするんですか!」と怒られる。一日中クーラーのきいた部屋で事務仕事をしている人が一日の終わりに居酒屋で飲むビールとは全然違うものであるはずだ、と社長は力説する。それで結局ビールを飲む。

社長には僕のメールアドレスや携帯の番号、連絡先を書いた紙を渡しておいた。また行けたらいいが。

飯場に帰って事務所に顔を出したら、会計に時間がかかるというのでごはんを食べて風呂に入る。「今日の分の飯場代ももう入ってるんだから」と言われる。せっかくだからそうする。

風呂から上がって一息ついてちょうどいい時に番頭さんが呼びに来る。「また来てね。でもあまりバイトはできないか」と女社長と名残を惜しんだ<sup>47)</sup>。また来ていいんだなあ嬉しかった。

駅へ行こうとする待ち構えていたかのように大塚さんがあらわれた。「一杯奢ってやる」というのでコンビニに向かう。荷物を1つ持ってくれた。「荷物増えとらんか!?」「服もったりしましたから」「けしからん奴だ(笑)」みたいな会話をする。

「どうだ、研究になったか?」と聞かれて「めちゃくちゃ面白かったし勉強になった」と言うと、「お前は楽しかったかも知れんけどな、そのおかげでこっちは大変だったわ!」と言われる。こう言われてひょっとして大塚さんは僕のことを案じて飯場に入ってくれたんだろうかと気づく。

橋のところまで行ってビールを飲みながら大塚さんと話す。現場で気に入られて気持ちが揺らいでいると言っていた。

「わし見た目怖いか」とか聞かれた。とりとめの無い話をした。これは少し別れを惜しんでいる会話だ。

「お前には羽がある。大きくはばたけ。わたしの羽はもう小さくしぼんでしもうた」といつて励まされる。また西成で会う約束をした。

また人と出会ってしまった。出会いはすてきだ。

アルコールが抜けずにふらふらのまま電車に乗り大阪に帰る。家の近くの駅に降りて、コンビニで2リットルの清涼飲料水を買ってがぶ飲みする。飯場から帰ったらその日は行きつけのバーに顔を出そうとずっと考えていたのだが家についてほんやりしているうちに寝てしまった。クーラーをがんがんきかせた。

## 5 おわりに

「飯場日記」の特徴は、筆者自身の感情の揺れ動きが記述に組み込まれている点にある。執筆者の感情は、通常の論文におけるデータの扱いでは控えられるべきものである。しかし、本稿ではあえてそれを表に出し、飯場の労働と生活の過程を追体験的に理解可能なエスノグラフィーとして提供した<sup>48)</sup>。

現在の筆者の視点で「飯場日記」を読み返すと、当時の戸惑いや着想は那样的外れではないように思われる（もちろん、誤解や勘違いをしている箇所はあるが）。のちの仕事上での配慮の有り様や、飯場内での人間関係における立ち居振る舞いなどは、最初に入った飯場である A 建設での経験が核となって形成されているし、その多くが既に「飯場日記」の中に現れている。

飯場労働を始めたばかりの飯場労働者はまず戸惑いながら仕事を覚えていく。初心者には「自分に何が分からないのかも分からない」。彼は、怒鳴られ、笑われながら徐々に力の入れどころと抜きどころを心得ていくのである。飯場内の人間関係においても同様である。一見、希薄であるような飯場内の人間関係だが、その背後には気遣いを持続させなければならない緊張感が隠れている。

仕事や人間関係に慣れ、飯場労働や飯場生活そのものへの不安がなくなっても、飯場で<契約>を終わらせるまでに付きまとう不安がある。天候が悪ければ仕事が無くなる。飯場への依頼そのものが減少すれば休まされる。自分がどんなに努力しても避けられない困難が<契約>にはつきまとう。また、自分自身の努力で達成されること、つまり、自発的には休まずに毎日働きつづけるということも、単に努力だけでどうにかなるものではない。頻繁に替わる派遣先や仕事内容に日々対応して働きつづけることの困難がそこにはある。

さらに、「飯場日記」からは飯場という事例の周縁も窺える。ここでは釜ヶ崎がそれにあたるが、求人ルートと飯場との関係も考察されねばならない。また、派遣先（雇用主）との関係や彼らによる飯場労働者の扱いからは、建設産業全体の中での飯場の位置づけに照射されて、建設産業そのものの問題も垣間見える。

「飯場日記」には個別に取り扱うことが可能ないくつもの論点が含まれている。その一部はすでにまとめているが[渡辺 2006]、多くは手つかずのままである。それらを一つ一つ拾い上げ、分析していく作業が今後の課題である。筆者は A 建設の他にも 2 つの飯場で調査を行っており、「飯場日記」と合わせてのべ 99 日のデータを蓄積している。これらを元に、飯場という経験のより長期的なありようにも注目していきたい。また、単に経験が蓄積されるプロセスへ注目するだけでなく、飯場労働者の生活世界がどのような要素で構成され、それらの要素がどのように作用するのか、そして、そういった中で飯場労働者はどのように行為するのかを明らかにしていきたい。さらに、これらを元に、歴史的に「飯場」が担ってきた役割とその変容を視野に入れた「飯場研究」を展開し、都市下層研究や労働研究に広く貢献していくことを目指したい。

[注]

- 1) 建設業における人材派遣は一部を除いて禁止されているが、実際には常態化して行われている。
- 2) 近年の寄せ場の変容については、島 [2001]、田巻・山口 [2000a ;2000b]、中村 [1998; 1999]、西澤 [2000]などを参照。
- 3) 表面化したもので、最近では朝日建設にまつわる事件がある。この事件については荒木 [2004]、松原 [2004]などを参照。暴力飯場一般については玄 [2003]、大谷 [1976]、平井 [1997]、秋山・森・山下 [1960]などが参考になる。
- 4) 釜ヶ崎では「西成労働福祉センター」(以下センター)の1階で求人が行なわれる。センターのシャッターが上がるのは5時だが、4時前からセンター周辺では求人が行なわれている。かつてと比べて求人時間は早まっている。
- 5) 筆者は2001年5月から9月にかけての約2ヶ月間、卒業論文執筆のための住み込み調査を大阪市西成区の西成公園で行っている。当時、西成公園には200を超えるテント小屋があり、多くの野宿者が生活していた。保田さんはその時に知り合った人で、門脇さんはその友人である。
- 6) 寄せ場に集まる労働者たちはいつも朝の4時前に起きて仕事を探すわけである。その挙句アブれる(仕事につけない)かもしれないだからたまらない。朝の4時にセンターに行って、仕事にありつけないとしても仕事が始まるのは8時からである。4時から8時までは車の中や会社の事務所、あるいは現場のプレハブでぼんやりしているしかない。人によっては寝ている。「ここで働く人たちはそれ(仕事が始まるまでの数時間で睡眠をとること)ができないとやっつけていけません」という言葉のある人から聞いたことがある。連日働こうと思えば寝られる時に寝ないと保たない。そして仕事が終わるのは午後5時である。現場が遠ければ釜ヶ崎に帰ってくるのは夜の8時くらいになることもある。拘束時間は16時間にもなる。それから食事、風呂、洗濯を済ませて寝る。翌朝4時前に起きてまた仕事に行こうと思ったら大変だ。
- 7) 求人を訪れる業者は西成労働福祉センターより発行される求人プラカードを表示している。
- 8) どのような飯場を指して「ケタオチ(飯場)」というのかについては検討が必要である。センターに求人に来ている業者全てを「ケタオチ」という場合もある。
- 9) 手配師は労働者の選別を行ない、業者と労働者の仲介役を務めて中間マージンを得る。
- 10) ここでは手配師と書いているが、この人は正確にはA建設の社長だった。労働者を移送するための車を運転する人間は飯場から来ているのが一般的なようである。求人車には飯場の人間と手配師と両方来ている。どちらにせよ飯場の人間は寄せ場に来なければならないのなら手配師の手を借りずに、直接求人すればよいとも思えるのだがそういうわけにはいかないようだ。
- 11) 太田さんには名前が三つあった。本論文中の人物名は全て仮名であるが、例えば、「太田」、「犬田」、「天田」といった具合に点の位置を変えたり、棒を一本増やしたりというバリエーションがあった。大塚さんが太田さんと呼ぶ場合、通りすがりの知人が呼ぶ場合、ドヤの宿帳に書く場合のそれぞれが違った。
- 12) 例えば、太田さんが覚せい剤を打っていることや、立ち寄った人の小指がなくて、大塚さんが面白がってその人から指を落とした時の話を聞き出そうとしたことである。フィールドノートをまとめた時点ではこのエピソードを書くことにためらいがあった。しかし、大塚さんも本気で書くなど釘を刺していたわけではないし、釜ヶ崎では神経質になって隠すほど珍しい話でもないだろう。太田さんはボロシャツの袖をまくり、注射痕を見せて、「でも、俺は誰にも迷惑はかけてない。俺がやっとなだけや。誰にも迷惑はかけていない」と言った。薬物使用についての追及より「誰にも迷惑はかけてない」という彼の言葉の意味を考察することの方が重要であろう。
- 13) 「昔よく泊まっていた600円のところ」は1畳ほどの板張りの個室に布団と枕、そして、灰皿とハンガーがあるのみという最低レベルのドヤだった。ドヤは安くても500円から高くても3000円くらいまでで、値段が上がるとともに広くなり、テレビ、エアコン、共同浴場といった様々なオプションが付いてくる。

- この時、筆者が泊まった部屋は、広さは600円のところと変わらなかったが、一応畳敷きで、テレビがあった。テレビを見るときは備え付けのイヤホンを使う。クーラー付きと言っても廊下に大型のクーラーがあるというだけで、冷気を入れるために宿泊者は皆、扉を少し開けて寝ていた。
- 14) 60代。障害年金で暮らしている。
  - 15) 居住スペースとして、個室が各階20室程度に区切られた2階建てのプレハブが2棟あり、共同スペースとして、水場、トイレ、洗濯所、脱衣所・浴場の建物が1棟（この2階も居住スペース）、厨房、食堂、事務所が区切られた建物が1棟であり、中心部にコの字型に建物が囲うように、小さな駐車スペースがある。
  - 16) この飯場は寄せ場とは違う求人方法をとる飯場と考えられる。この会社はそれぞれの飯場を使い分けているということになる。
  - 17) 飯場労働者の仕事を一般に「手元仕事」という。
  - 18) この元請、下請、孫請のピラミッド構造についてはいろんな現場でいろんな人から聞いた。ピラミッドの下の方の人間ほどこのピラミッドにうんざりしている。建設業界に独特な下請が幾重にも重なる構造は重層下請構造と言われている。詳しくは[筆宝 1992]を参照。
  - 19) 飯場でもそれくらいことは確認した上で派遣する労働者を選んでいる。雇主の方も、「今日は仕事のできるやつを頼む」、「今日は前に来てもらった〇〇さんを頼む」といったように希望を出す。特に技術的な熟練のいらぬ作業であっても、真面目に働く、気が利くなど、派遣先の監督、雇主から良い評価を得ることは大切だ。気に入られればそれだけ仕事に出るチャンスが増えるということである。
  - 20) 別の、土木の会社では大ハンマーと言っていた。同じ道具でも、職種によって呼び名が異なる場合がある。
  - 21) 筋力がない、要領が悪い、それでも言われたことを言われた通りにやる。バカ正直に働く奴ならそれでいい。逆に言えば、その程度のことしか期待されていない。もちろん、同じ手元でも経験と熟練が必要な作業もある。しかし、ここで重要なのは、単に「素直に言うことをきく」というだけで一つの評価のポイントになるということである。飯場労働における熟練については渡辺[2006]にまとめている。
  - 22) 結果的に白井さんとの仕事はもう無かった。でも、考え様によってはそれでよかったのかもしれない。もしかするとずっと白井さんのところだったかもしれない。それよりはいろんな現場で仕事できた方が経験としてはよかった。
  - 23) 言うまでもなくショベルカーのことなのだが、筆者はショベルカーのことをユンボと呼ぶことを飯場に入って働くまで知らなかった。それほど無知だった。また、道具や機械の名前を耳でしか確認できなかったため、しばらく「ユンボ」は「ゆんぼう」だと思っていた。
  - 24) しかし、この日は倒れるかと思った。結局この日は予定されていた場所全てを舗装することはできなかった。最後の休憩で「あと2本で終わりだ」と会社の人が言う。しかし「あ、違うか3本や」と言われて死にたくなかったが、これはこの人の冗談だった。一度くらい倒れてみるのも経験かと思ったが倒れるほど働くのは地獄の苦しみであろう。幸い、今まで働いている最中に意識を失ったことはない。
  - 25) このように、のんびりできると思っていたら突然別の現場に行ってくれと言われることもあるので飯場の朝は落ち着かない。
  - 26) 「通い」とは、飯場の寮には入らず、自宅から通っている場合を言う。筆者が入寮した時期の飯場の入寮者が約20名、通勤者が約10名といった構成だった。
  - 27) 西藤さんの店で「分からんことは（一緒に行っている者に）教えてもらえる」と聞いていた。
  - 28) バッカンは鉄製の大きな箱である。建設現場で出るゴミを仕分けして入れ、いっぱいになったらレッカーでトラックに乗せて交換するといった使い方が一般的である。東野さんの知識が間違っているのか筆者が聞き間違えたのか、それともコンクリートの鉄棒もバックカンと言うのかは不明。
  - 29) 前日に見てプレートという機械について知っていたので、戸惑わずに済んだという話である。道具

- の名前、用途を知っていると、何を指示されているのかわかる。知らないとうからない。現場で何が行なわれているのか、自分が参加しているのは作業のどの工程・段取りなのかを理解する手がかりになる。渡辺 [2006] 参照。
- 30) クワではなく、バチと呼ばれる道具だとのちに知った。形状はクワだが、歯の幅が狭い。
  - 31) 日雇労働求職者給付金のこと。「日雇雇用保険は、労働者が1日働くごとに雇主が被保険者手帳（表紙が白いことから、白手帳と呼ばれる）に印紙を1枚貼り、それが2ヶ月間に26枚たまると、翌月の1日～17日をかぎって、最高7500円（1994年）の失業保険が労働者に給付される」[青木 2000: 48]。
  - 32) つまり、カウンターで対応していた「女社長」は、実質的な職務は「専務」だった。
  - 33) 外出の断りをいれる必要があるのかわからないのかよくわからなかったので、一応断っておいた。実際は特に門限のような規則はない。入寮者間の暗黙の了解として20時を過ぎたら表で騒がない、21時過ぎたら自室で静かにしている（寝る）というような規則はあったので、夜遅くの入出りは静かにしなければならない。寮の部屋はベニヤ板で仕切られている程度であり、扉の開閉の音、廊下の足音、階段の昇降でさえ気を遣う。21時を過ぎると筆者はフィールドノートをつけるのにごそごそする程度のことでも気が引けた。
  - 34) 「棒心」、「ボーシン」——もともとは飯場内の労働者の序列で、飯場に長くいて、現場で指導的な立場に立つ労働者のことを言う。ここでは「一緒に行くベテラン」か『現場監督』くらいの意味だと考えられる。
  - 35) 休みになればそれだけ天引きでマイナスになるということはわかっているのだが、一週間働き続けるには大変な苦労がある。その後、別の飯場で就労している時、水曜日が祝日で休みだったことがある。そのせいか、その飯場では「週の真ん中が休みならちょうどいい」という話がよく聞かれた。確かに、水曜日から木曜日が休みになると一週間が早く感じられて楽だというのは筆者の実感としてもある。
  - 36) コンクリートを流し込むための枠組みのこと。型枠とも言う。コンクリートが固まったところで仮枠は解体する。
  - 37) 「トンコ」とは、労働現場や飯場からこっそり逃げ出すことをいう。
  - 38) 「棒心」同様、現在ではあまり一般的な言い方ではないが、「世話役」というと、労働者の中でもリーダー的な役割を担う者を指す。
  - 39) 西成公園で調査時、筆者に小屋を貸してくれた男性。筆者は彼の「ホームレスの仕事」を手伝っていた。
  - 40) 次にA建設に来る時は、A建設に電話して直接来ればいいと教えてくれたのも遠藤さんだった。寄せ場から入ると手配師に支払う仲介料が日当から1,000円引かれる。その分が浮く、その方が賢い、ということだった。10日契約の労働者を1人入れたら手配師には1,000円×10日で10,000円入る。
  - 41) 鶺鴒 [1994] は大衆演劇の劇団で1年2ヶ月の参与観察を行っている。
  - 42) 剣スコ→剣先スコップ、箱スコ→箱先スコップ（「角スコ」「角スコップ」とも）。要するに先が尖ったスコップと先が四角いスコップ。
  - 43) 実際は角度の問題であった。土の山の中程に突き刺し、スコップを逆に返す。そうすると返す時に土を多く載せることができる。この時の筆者は突き刺したスコップを返さずに、そのまま引き抜いていた。
  - 44) 例を見せる人はいとも簡単にすくってみせる。言葉での説明はない。どこがポイントなのか筆者にはまったくわからなかった。これは働いているうちにいきなりできるようになった。そして、これを言葉で説明して他人に理解させるのは困難だと思う。なぜなら、「単に、すくえばいい」という以上の説明が成り立たないからだ。難しいことを考えずに、地面にたまっているゴミをすくえばいい。手元にチリトリが無く、探しに行くのもバカバカしいと思い、失敗しても周りに誰もいないのだからと気楽にやったらできた。筆者の持ち前の要領の悪さを差し引いて考えなければならないが、道具が手に馴染むまでにはそれなりの時間が必要である。
  - 45) この他、この後の調査も含めて、筆者が学生であることを知った人に付けられたあだ名には、「博士」、「志願兵」、「大学生」、「大学院生」などがあつた。「志願兵」というのは派遣先の会社の人につけられたあ

- だ名で、「学者（研究者）」がわざわざ土工に志願してきたという意味合いを含んでいる。また、何を勉強しているのか聞かれ、「社会学というのをやっています」と答えた際、「今度わしに社会教えてくれや」とか「しかし、社会学ももう古いよね」などと言われ面食らった。
- 46) 精算の前日にそのことを申し出ること、土曜は精算ができないので、月曜の朝の精算になることを入寮時に言われていた。
- 47) 大工の白井さんにも、筆者が大学院生であることを話していた。彼女は白井さんから筆者が大学院生であることを聞いたそうだ。「昔は学生さんもよく仕事に来てくれたのよ」と彼女は言っていた。「今は景気悪いですからね」と応えると、彼女は「でも、今も結構いい値段出してると思うよ」と毅然として言った。彼女のこの言葉には人夫出し稼業の誇りのようなものを感じた。
- 48) これまでのエスノグラフィーの在り方を再考し、エスノグラフィーの可能性をひらいていくことを松田素二・川田牧人はその編著である『エスノグラフィー・ガイドブック——現代世界を複眼でみる』[松田・川田編著 2002]で提起する。本稿のように日記形式を活用したエスノグラフィーに同書で紹介された鶴飼[1994]がある。詳しくは同書の該当箇所[松田・川田編著 2002: 196-197]参照。

[ 参考文献 ]

- 青木秀男, 2000『現代日本の都市下層』明石書店
- 秋山健二郎・森秀人・山下竹史編著, 1960『現代日本の底辺 第3巻 不安定就労者』三一書房
- 荒木剛, 2004「殺人飯場からの報告」『新日本文学』新日本文学会, 59 (6) : 156-164
- 鶴飼正樹, 1994『大衆演劇への旅 南條まさきの一年二ヶ月』未来社
- 大谷正夫, 1976「飯場脱走記」寺島珠雄編『労務者渡世 釜ヶ崎通信』風媒社: 14-21
- 北川由紀彦, 2002「山谷・飯場・日雇労働に関する行政資料紹介（飯場に関する行政資料紹介）」日本寄せ場学会『寄せ場』15: 93-112
- 玄秀盛, 2003『新宿歌舞伎町駆けこみ寺 解決できへんもんはない』角川春樹事務所
- 島和博, 2001「労働市場としての釜ヶ崎の現状とその『変容』」『人文研究』大阪市立大学大学院文学研究科紀要, 53 (3) : 23-49
- 田巻松雄・山口恵子, 2000a「野宿者の就労面——東京東部圏（山谷・上野）の野宿層聞き取り調査報告」『季刊 Shelter-less』野宿者・人権資料センター, 5: 101-118
- 、2000b「野宿層増大の背景と寄せ場の変容——『山谷、上野調査』からみる飯場労働の実態」日本寄せ場学会『寄せ場』13: 76-90
- 中根光敏, 1999「アンダークラスとしての寄せ場——釜ヶ崎を中心として」青木秀男編著『場所をあける！——寄せ場／ホームレスの社会学』松籟社: 199-223
- 中村光男, 1998「寄せ場と飯場の10年——山谷を中心に」日本寄せ場学会『寄せ場』11: 168-175
- 、1999「飯場居住型層の飢餓賃金——上野の労働相談から」『Shelter-less』野宿者・人権資料センター, 4: 55-63
- 西澤晃彦, 2000「都市下層の可視化と変容; 野宿者をめぐって」日本寄せ場学会『寄せ場』13: 27-37
- 筆宝康之, 1992『日本建設労働論——歴史・現実と外国人労働者』御茶の水書房
- 松田素二・川田牧人編著, 2002『エスノグラフィー・ガイドブック——現代世界を複眼でみる』嵯峨野書院
- 松原秀晃, 2004「寄せ場—公園—路上を貫く労務支配の構造——広がるヤミ手配・ケタオチ飯場を打ち砕け！——朝日建設争議が問いかける階級的債務——」『飛礫』つぶて書房, 44: 43-52
- 渡辺拓也, 2006「絡めとられる労働意識——飯場労働者の労働への意味づけについての考察」日本寄せ場学会『寄せ場』19: 136-147

大阪市立大学大学院後期博士課程  
わたなべ たくや